

の瀆されざらんを欲する也。かれらの赤裸なるを恥ぢて自ら蔽ひたりと云ふ無花樹の葉とは、彼等の自愛と我慢とに關する事物を隠くさんための道德的眞理を義とす。彼等がその後その身に纏ひたる皮の上衣とは、眞理の外觀即ち影像にして、彼等が有せる所は此の外にあらざりき。これを此の如き諸事物の靈的意義となす。されど、これを文字のみによりて解せんと思ふものは、しかするを妨げず、只天界にてはかくの如く會せらると云ふことをわすれざるべし

三百十四。おのれに本具の分別識によりて自ら迷へるものは、如何なる性質の人かと云ふに、彼等が内的判斷をなすべきことに關して、假令ば流入、想念、生命などに關して、如何にその構思力を用ゆるかを見れば、之を知り得べし。流入に關しては、彼等の思惟する所は事實に反せり、即ち彼等は眼の視覺を以て心の内視、即ち智性に流れ入るとなし、耳の聽覺を以て内聽、即ちまた智性に流れ入るとなして、その智性が意志よりして眼及び耳に流れ入ることを見ざるなり、智性は此くして五官を成すのみならず、自然界におけるおのが機關として之を使用する也。此の如きは外觀に準ぜざる處なるが故にて、彼等は之を見得せざるなり。而して人もし自然

性は靈性に流れ入らずして、靈なるもの却て自然に流れ入ると云ふとも、彼等は尙以爲らく、靈なるものも畢竟自然の醉なるものにあらずやと、また曰ふ、目にして美しき物體を見、耳にして音樂をきくときは、意志と智性とより成れる心は、これがために樂むにあらずやと。されど、彼等は目自ら見ず、舌自ら味はず、鼻自ら嗅かず、皮膚自ら感應せざることを知らざるなり。しかも此等の感官にありて、此の如き事物を覺知し、其感官の特性によりてそれ／＼に動かさるるは人の心なり、人の靈なり。されど、此心、此靈も亦おのれよりして此の如く感受するにあらず、主よりして然る也。此の如く思惟せざるものは、是れ外觀に捕はれたるものにして、之を決定するものは、妄想のために動かされたるもの也。

次に想念に關しては、彼等以爲らへく、想念とは空氣中における何等かの變態にして、その對境に従ひて異り、その人の教育によりて進歩すべし、故に概念とは現象なり、空中に現はるる流星の如し。記憶は牌の如くにして、概念はここに印せらる。されど、彼等は想念の、純然たる有機的實質と關係すること、猶視覺、聽覺がその眼及び耳と關係するが如きを知らざる也。頭腦を檢して見よ、此の如き實質の

ここに充塞せるを見るべし、之を傷つければ錯覺を生じ、之を毀てば、その人死すべし。されど尙想念と記憶の如何なるものなるかは、上記の處を見るべし(二百七十九の下の方を見よ)。

生命に至りては、彼等以爲らく、是れ自然における一種の活動にして、様々に之を感受し得べし、猶ほ生物が有機的に自ら動くときの如しと。されば、自然は活けるものかと云ふに、彼等は之を否定して、自然は生命を賦與するものなりと云ふ。さらば身體死するときは生命は分散し去るにあらずやと云へば、彼等は答へて、生命は精神と云へる空氣の分子に留まるべしと曰はん。また問ひて、さらば神とは何ぞ、神は生命そのものにあらずやと曰へば、彼等は黙して答へず、その思ふ所を口にせざるべし。更に、神愛及び神智は生命そのものなることを、汝果して認めざるかと問はゞ、彼等、愛とは何ぞ、智とは何ぞと問ひ返すべし。何となれば、彼等の迷妄なるや、愛と智との何たり神の何たるを見ざればなり。

此の如き事をここに記せるは、人は如何にしておのが本具の智慮に迷はされ、外觀即ち影像従ひて幻惑より立論し、結論せんとするかを見せしめんためなりとす。

三百十六。

〔羅向原文に三百十五の番號なし〕

人間に本具の智慮は、何故にすべての善と眞とをおのれよりづ出るもの、またおのれに存するものとなさんと欲して、而してかく確定するかと云ふに、おのれに本具の智慮なるものは自愛即ち人の意的我よりして流れ出づる智的我なるが故なり。自我の念はすべてのものをして、わが有となさざれば已まざらんとするもの也。これ自我はこの念を超越する能はざるに由る。

されど主の神慮により導かるるものは、みな此自我を超越し、そのとき、すべての善及び眞は主よりするものなることを見るべし、かれらはまた實に、主よりして人に存するものは、これ一に主の所有にして、わがものには決してあらざることを見得べし。此の如く思惟せざるものは、主人の所有品を預りながら、これをわがものなりと稱して、自ら之を横領するもの如し、故に此の人は是れ執事にあらずして、盜賊なり。而し人における自我の念なるものは、惡ならざるはなきが故に、その惡の中に善をも眞をも流入し了り、之を濫用すること猶ほ糞堆の中、或は酸類の中に投げすてたる眞珠の如くなり。

三百十七(第三)。人の自ら勸めて、自ら決定したるものは、すべて自我として、その

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

中に留まること。真理は立證せられたる事物においてのみこれを見得すべしと信ずるもの多けれども、それは誤りなり。國家の社會的、經濟的事業においては、その國の條規、律例などを多く知るにあらざれば、何を用ふるものとなし、善なるものとなすべきかを見得する能はず、裁判上の事にも亦然り、法律の智識必要あり、また物理學、化學、解剖學、機械學などにおける自然的、事物においてそれらの科學の智識を學得するにあらざれば不可なり。されど純然たる理性上の事物に在りては、即ち道德的、靈的事物に至りては、人もし適當の教育を受けて、理的、道德的、靈的となりたらんには、真理はそのまゝの光にて見得ゆるべきなり。その理は、人はみな、その靈より見れば、即ちその人をして思惟せしむる所のものより見れば、靈界にありて、そこに住せるものの中に在りて、而して此光明は人の智性の内分を照らして、之を教ゆと云ふべければなり。靈的光明はその實性において主の神智よりする神眞なり。故に人は分析的に思惟する力あり、法制上の事物においては正義、正道の何たるかにつきて推論を下す力あり、また道德上何を尊ぶべきか、靈的生涯には何を善とすべきかを見得すべき力あり、その

外諸種の眞理(こは確定せる諸僞によらざれば朦朧とならざるものとす)をも見る力あり。而して人の此の如き眞理を見るは、殆んど他人の面を見てその心を感じし、その音聲をきいてその情動を感じするに似たり、こは各人に本來具はれる智識によりて行はるゝ也。既に動物をしておのれに必要な自然的事物に關する智識を、流入によりて有せざるはなしとすれば、人も亦その生命の内分、即ち靈的、道德的なるものを、何分か流入によりて見得せずと云ふことあらんや。鳥は如何にその巢を作り、卵を孵化し、雛を養育すべきかを知り、またその實物の性質を知れり、其外、本能と呼ばれるものに驚異すべきこと少々にあらざる也。

三百十八。如何にして人の情態は決定により、それより勸誘によりて、變化するかを次の順序によりて説くべし(一)今よりして決定せられざるものは一も之れあらず、僞りは眞よりもしかし易きこと。(二)僞にして決定せらるるときは、眞露はれざることを、されど眞にして決定せらるれば、僞露はるること。(三)わが好む所を決定する力は分別識にあらずして、只巧智に過ぎざること、而してこは極惡の人も所有すること。(四)智的決定あれども、それと同時に意的決定はあらざること、されど、す

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

べての意的決定はまた智的なること。(五意の上にも、智の上にも悪を決定するとき、その人はおのが本具の智慮を以て一切となし、神慮を皆無と信ずるに至ること、智的決定だけには、しかることなきこと。(六意志によりて、之を決定すると同時に、智性によりて亦之を決定するときは、そのものは永遠に此の如く存すること、されど智性だけにて決定するものは是事なきこと。

第一項。人によりて決定せられざるものは、一も之れなく、偽は真よりも、しかし易きこと。無神論者は、神を以て宇宙の創造者にあらずとなし、自然を以て自らの創造者となし、宗教を以て唯愚かなるもの普通の人民を制裁するの具に過ぎずとなし、人を動物に等しとなし、また動物の如く死滅するものとなすなり、既に此の如きことすら立證し得べくば、何事をか決定し得ずとせんか。また姦淫、竊盜、詐偽、詭計を以て咎むべきにあらずとなし、巧智を分別識となし、奸佞を以て智慧となし得べくば、人は何事をか決定し得ずとせんか。誰れかわが邪説と決定せざるものあらんや。基督教界を左右せる二個の邪説を決定せんための著述既につきみ重なるにあらずや。汝もし十條の邪説を建立せんとして、これを實證せんため、巧智に長け

たるものと相謀るとせんか、如何に深遠なるものと雖、彼は此十條を決定し了すべし。汝其のち立證の跡のみよりして之を見れば、偽も亦眞の觀を呈するにあらずや。一々の虚偽は、その外觀上よりして、またその人を幻惑せんとする特性あるより見て、自然の人の眼中には、如何にも瞭々として輝くべし、されど眞理は必ずしも然らず、只靈の人に向つてのみ此の如きことあり。故に知るべし、偽を決定するは眞よりも一層容易なることを。

その偽、その惡は之を決定して、偽は眞の如く、惡は善の如く見えしむるを得ることを知らさんため、われはこゝに一例を擧げん、即ち光明は暗黒なり、暗黒は光明なることを證せしめよ。まづ、光明はそのままにてこれを何となすかと問ひ得べからざるか。光明とは只そのものの情態によりて其目に映ずる一種の影像に過ぎざるか。目を閉づれば、何を光明とせんか。蝙蝠及び梟の目は光明を暗黒となし、暗黒を光明となすにあらずや。われは此の如くにして物を見得ると云ふ人あるを聞けり、また暗黒中に居ながら、互に相見るを得べしと言ふ地獄の精靈のことをも聞けり。人はまた眞夜中にて、夢中に光明を見ざるか。さらば暗黒は光明に

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

て、光明は暗黒にあらざるかと。されど之に答へて曰ふべし、畢竟是れ何のためぞ。眞の眞なる如く、光明は是れ光明なり、偽の偽なる如く、暗黒は是れ暗黒なり。

今一例を擧げんに、鴉は白しと云ふことを證せしめよ。その黒きはその實我に屬せざる一種の陰影に過ぎずと云ふべからざるか。鴉の羽の内面は白し、その體軀も亦然り、而してこは實に鴉を構成する所の實質なり。その黒きは一種の影に過ぎざるが故に、その老ゆるや、鴉は白色となるべし。此の如きは人の目撃したる所なり。また黒と云ふも、そのままの實質は白にあらざるか。黒色の硝子を粉にして見よ、此粉は白きにあらずや。故に人の鴉を黒しと云ふは、その影を見てその實體を見ざるが故なりと。されど此の如きは畢竟是れ何の用ぞ。此立論を推せば、すべての鳥を以て白しとなし得べし。こは全く健全なる理性に背ける所なれども、此にこれを記述したるは、眞と全く相容れざる偽も、善と全く相容れざる惡も、亦以て決定し得べきを示さんためなり。

第二項、偽の決定せらるるときは、眞露はれず、されど眞の決定せらるるときは、偽露はるること。偽はすべて暗黒に在り、眞はすべて光明に在り。暗黒中には

何ものをも見るべからず、手に觸れて之を感ずるにあらざれば、そのものの何たるかを知るべからず。光明中に在りては之と異なり。故にまた聖言には偽を暗黒とも云へり、而して偽に在るものと呼びて暗黒中を歩むもの、死の影に歩むものと云へり。之に反して、眞は光明なりと云へり、故に眞に在るものは光明中を歩み、また光明の子なりと呼ぶ。偽決定せらるるときは、眞あらはにあらざり、眞決定せらるるときは、偽あらはになると云ふことは、數多の事物よりも分明なり。譬へば、もし聖言にして靈的眞を教ふることなくば、誰れかこれを見るべき。もし聖言が有する光明にあらず、またこれによりて照らさるるを喜ぶにあらざれば、世は暗黒となりて、また之を排除すべからざるにあらずや。もし教會に屬する如實の眞を認むるにあらざれば、邪説を奉ずるもの、如何にしておのが邪偽を見得せんや。これよりさきに當りては、彼之を自覺せざる也。

われ嘗て仁を離れたる信の上に自ら決定したる人々と談話したることありしに、われ彼等に問ひて曰ふ、汝等は聖言中に多く愛及び仁、事業及び行爲、神誠を守ることにつきて言ふ所あるを見ざりしか、またこれを行ずるものは福にして、智しと

云ふこと、之を行ぜざるものは、愚かなりと云へるを見ざりしかと。然るに彼等は答へて曰ふ、われら此の如き事を讀めるとき、これを以て唯信を言ふものとなして看過し去れり、恰も目を閉ぢて走り過ぎたるが如かりきと。自ら偽を決定したるものは、壁上の黒點を凝視するもの、如し、黄昏の薄くらがり、に之を見れば、彼等の幻想はこれを以て或は馬となし、或は人となすことあらん、されば此の如き幻影は、朝日の上ると共に消え行くものとす、自ら貞節の靈的清淨に住するにあらざれば、誰れかよく姦淫の不淨なるを會せんや。隣人の愛によりして善に居るものにあらずれば、誰かよく復仇の慘毒を會せんや。姦淫と復仇よりする快感を地獄的となし、また夫婦の愛及び隣人の愛よりする歡喜を天界的となすものあらば、何もの姦淫、復仇に渴するものか之を嗤笑せざるあらんや。

第三項、わが好む所に任せて之を決定する力は、分別識に、あらずして、只巧智なること、而してこは極惡の人も亦有し得るところなること。何等眞理をも知らざれども、しかし眞と偽とを併せて決定するに極めて巧みなるものあり。或は言ふ、眞とは何ぞ。かくの如きものあるか。わが眞となす所、是れ眞にあらずやと。さ

れど世間にては此の如きものを分別識に長けたりとなせり、その實は壁の上塗に過ぎざるなり。分別識ありと云ふべきは他の人にあらず、眞を見て眞となす人となり、而して彼はこれを決定するに、彼が斷えず覺知するところの諸眞を以てすべし。此二類の人は區別すること難し、そは決定の光明と眞を覺知する光明との差異は、辨別し易からざればなり。かつ決定の光明に在るものは、亦眞覺の光明に居るもの、如く見ゆる外あらざればなり。されど其實、兩者の差は、幻の光明との如し。靈界にては、幻の光明は、眞の光明の流入に遭へば轉じて暗黒となる也。地獄に在るもの、多數は此の如き幻影の中に在り、眞光明をこゝに造れば、彼等は何ものをも見得ざるに至る。これによりて、わが好む所に任せて、之を決定する力は、只巧者に過ぎずして、極惡の人にも亦これあるべきを明らめ得べし。

第四項、智的決定あれども、之と同時に意的決定は、あらざることを、されど、すべての意的決定は、亦智的決定なること。こは例によりて説くべし。仁を離れたる信に安住して、而かも仁慈の生涯を送りたるもの、一般に云へば、自ら偽りの教説を決定しながら、尙此教説に遵へる生涯を送らざりしものは、是れ智的決定にをりて、こ

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

れと同時に意的決定に居らざるもの也。されど自ら偽りの教説を決定し、また之に従へる生涯を送るものは、智的決定にも居り、またこれと同時に意的決定にも居るもの也。その理は、智性は意志に流れ入らざれども、意志は智性に流れ入るが故なり。之によりて悪よりする偽とは如何、悪よりせざる偽とは如何と云ふを明らかに得べし。悪よりせざる偽は善と和合し得べし、而して悪よりする偽は之と能くするを得ず。何故と云ふに、悪よりせざる偽は智性上の偽にして、意志の上にはあらず、而して悪よりする偽は、意志に存する悪より起りて智性の上に現はれたる偽なればなり。

第五項、意の上にも、智の上にも、悪を決定するとき、その人は、おのが本具の智慮を以て一切となし、神慮を皆無と信ずるに至ること、智的決定だけには、しかすることなきこと。世間における外観即ち影像よりして、自らおのれに本具せる智慮の上に決定するもの少なからず、されど彼等は神慮を否定するにはあらず、これを只智的決定となす。されど、かの神慮を否定するものにおいては、また意的決定あり。されど此決定に勧誘を兼ねたるは、主として、自然を崇拜し、また自己を崇拜す

るものゝ場合にあるものとす。

第六項、意志によりて之を決定すると同時に、智性によりて亦之を決定するとき、そのものは、永遠に此の如く有すること、されど智性だけにて決定せるものは、是事なきこと。何となれば、智性だけに属するものは、人のうちにあらず、その外に在ればなり、これ只想念の中に存するに過ぎざるに由る。意志に受け入れらるゝにあらざれば、何事もその人に入ることなく、その心に取り入れらるゝことあらず。意志に入るときは、そのもの始めに彼が生命の愛の一分となる。その永遠に至るまで此の如くに存することは、次節にて説くべし。

三百十九。意志にて決定し、亦同時に智性によりて決定したるものは、すべて永遠に此の如く存する所以は、人は皆その自有の愛にして、此愛は即ちかれが意志の愛なるに由る。而してまた人は皆その自有の善か自有の悪かなるに由る。何となれば愛に属するものはすべて之を善と云ひ、また同じく悪と云へばなり。人はその自有の愛なるが故に、人はまたその自有の愛の形式なり、またその自有の生命に属する愛の機關なりとも謂ふべし。さきに二百七十九、人の愛に属する諸情動

神慮は人をして善をも悪をもその心に取り入れしむることなし……

及びそれよりする諸想念は、その心の有機的實質の情態及び形式における變形及び變化なりと云へり。この變形及び變化は何如なるものにして、その特性は何かを今記述すべし。心臟と肺臓とよりして、これに關する思想を得べからんか、此の機關には交る／＼伸張あり、緊縮あり、また脹開あり、收縮あり、心臟にては之を收縮膨脹と云ひ、肺臓にては呼吸と云ふ、こは相互間の伸開と收縮となり、またその肺葉の伸開と收縮となり。これを心臟及び肺臓における變形と變化と云ふ、これと相似たることは、體中における自餘の臟腑にも、自餘の部分にも、之れあり、これにて血及び動物液は、受け入れられ、循環せらるゝなり。心の有機的形體中にも亦同様のことあり、而して此等の諸形體は人間が有する情動及び想念の主體なることは、上述せる如し。その相異の點は、こゝにおける擴がり及びすぼがりは、即ちその相互的關係は、前者に比してその完全なること一層高くして、自然的言語にては記述する能はず、只靈的言語のみ之を能くべし、此言語によりて得る概念如何と云ふに、その運用は渦卷に似たる内狀の運動にして、内外に轉ずること、猶ほ無窮に轉回する螺旋狀の如く、而してその互に相集りて生命を受くるに足るべき形式となすこと、

驚歎の外なきものあり。

今この純然たる有機的實質及び形式の特性は、惡人に在りてはいかん、善人にありてはいかん、かを説くべし。善人に在りては、かの回轉運動は前方に傾き、惡人に在りては後方に向へり。前方に傾ける回轉をなすものは、主に對して立ち、彼よりする流入を受くべし。されど後方に傾ける回轉をなすものは、地獄に向ひて立ち、それよりする流入を受く。而して此に知らざるべからざるは、かれが後方に傾くうち、それだけ後面を開きて、前面を閉づること、之に反して彼等前方に傾くうち、は、それだけ前面を開きて、後面を閉づること、是なり。これによりて知るべし、惡人の形式、即ち機關は如何なる種類のものに、また善人の如何と云ふことを、また兩者は各反對の方向に轉ぜることを。而して此回轉にして一たび導き入れらるゝときは、これを逆振する能はざるが故に、人はその死するときにおける如き情態を死後にもそのまゝ、保留するや、明らなるべし。此轉回を生ずるものは、人の意志に屬する愛なり、これによりて或は外に轉じ、或は内に轉ず。そは上述の如く、人はみな自有の愛なればなり。是の理によりて何人も死後には自有の愛に従ひてその

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

途を行くものとす。その愛にして善ならば天界に向ひ、悪ならば地獄に向ふ、而して彼はちのが所主の愛の屬する團體に入らず休むことなし。而して此の驚くべきは、何人もわが途を知らざるはなきこと也、彼は恰もその鼻にて之を嗅ぎ行くものに似たり。

三百二十(第四)。もし、人、真理の如くに、一切の善と眞とは、主よりし、一切の悪と偽とは、地獄よりすと信ずるときは、善をなしても之を、おのれに取り入れんとせず、また之を、おのが功とせざることを、また悪を、おのれに取り入れず、これを犯すことなかるべきこと。されど、こは智慮及び智慮を以て人よりすとなし、また心の有機的組織における情態に従ひて、流れ入るものにあらずと云ふ、こは前節に説けり、三百十九外観を見て自らその心に決定したるもの、所信とは、全く相反するが故に、今こゝに之を論證せざるべからず、而して之を分明にせんため、次の順序に従ふべし、(一)智慧及び智慮はわれよりするものにして、また此の故にわれの所有として、われに存するものとの外観を見て、自ら之に決定したるものは、もし此の如くならずは、われは人間にあらざるべく、動物か、木偶かならんと思ふ外あらざるべし、しかも事

實はこれと相反すること。(二)すべての善と眞とは主よりするもの、すべての悪と偽とは地獄よりするものと、事實の如くそのまゝに信じ、また思惟すること、不可能の如く見ゆべし、されどこれ實に人間的にして、従ひて亦天的なること。(三)かく信じ、かく思惟せんことは、主の神性を是認せざるもの、悪を罪と是認せざるものにとりてこそ不可能なれ、此二事を是認するものには可能なること。(四)此二事を是認するものは、只其心の中に存せる悪を省察し、而して悪を罪として之を避け、之を嫌忌する限り、悪をしてその由りて來れる地獄に退却せしむること。(五)かくて神慮は何人にも、悪をも、善をも取り入れしむることなし、只人に本具の智慮によりて何れをも取り入るゝこと。

三百二十一。今此順序によりて諸項を説明すべし。

第一項。智慧及び智慮は、われよりするものにして、また是故にわが所有として、われに存するものとの外観を見て、自ら之を決定したるものは、もし此の如くならずば、われは人間にあらざるべく、動物か、木偶かならんと思ふ外あらざるべし、而かも事實はこれと相反すること。人はおのれよりする如くして思惟すべく、又おの

神慮は人をして善をも悪をもその心に取り入れしむることなし……

れよりする如くにして智慮を用ゐて行動すべきこと、而かもわがかくなし得るは主よりするものなりと是認すべきこと、是は神慮の法則なり。故に知るべし、おのれよりする如くに、智慮を用ゐて、思惟し、行動して、而してこれと同時に、こは主よりすと是認するものは、是即ち人間なることを。されどわが思惟し、行動する所は、一としてわれよりせざるはなしと、自らその心に決定するものは、然らず。また智慧及び智慮は神よりすると知るが故にとて、徒らに流入を待つものも、亦然らず。何となれば後者は是れ木偶の如く、前者は是れ動物の如くなればなり。流入を待つものは木偶の如しとは、分明なるべし、そは此ものは兩手を垂れ兩眼を閉ぢ、或は大に開き、思惟せず、呼吸せず、茫然として或は坐し、或は立てばなり。此の如きものは何等の生命ありとせんか。わが思惟し、行動する所は一としてわれよりせざるはなしと信ずるものゝ、動物に異ならずと云ふも亦分明なるべし、何となれば彼は人間と動物とに共通なる自然心のみより思惟して、如實に人の心と云ふべき、靈的理性的心よりせざればなり。蓋し此心を有するものは、おのれよりして思惟するは神のみにして、人は神よりして思惟すと云ふことを是認すべし。故にかの自然

心のみを有するものは、人と動物との區別を知らず、只人は言説すれども、動物は音聲を發するに過ぎずと思へり、而して人と動物と共に死滅すと彼は信ぜり。

流入を待つものにつきて、尙一言すべし、彼等は流入を受くることなし。もしありとすれば、そはその心の底より之を願ふ僅少の人に過ぎず。此の如きは、時に想念中において活躍せる覺知によりてその應答を受くることあり、また默答を受くることあり、稀には顯はなる言語にて答へらるゝことあり。而してその畢竟する處は、彼等の願ふがまゝ、彼等の出來得るまゝに思惟し、行動せよと云ふに在るべし、かくて智者の如く行動するものは、是れ智者なり、愚者の如く行動するものは、是れ愚者なり。彼等は決して何をか信じ、何をか行はずべしと教へらるゝことなし、そは人の理性及び自由性の亡びんことを憚りてなり、此二つのものは各人をして、外觀の及ぶ限りは、おのれよりする如くにして、理に従へる自由よりして行動せしめんと云ふに在り。流入によりて何を信じ、何を行はずべしと教へらるゝものは、主によりて教へらるゝにあらず、また天界の天人によるにあらず、あるクエーカー徒或はモラビヤ徒の精靈によるものにして、此の如きは迷路に蹈み入るべし。主よりす

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

る流入は、すべて智性の覺照、及眞理の情動、及び情動より智性に流入によりて生ずるものとす。

第二項。すべての善と眞とは、主よりするもの、すべての惡と僞とは、地獄よりするものと、事實の如く、そのまゝに之を信じ、また思惟することは、不可能の如く見ゆべし、されど、これ實に人間的にして、従ひて亦天界的なること。すべての善及び眞は、神よりするものとなして、これ以上を言はざれば、何人も之を信じ、且つ思惟すること難きにあらざるに似たり。そは神學上の信仰に従ふものにして、之に背きて思惟するとは許されざればなり。されどすべての惡及び僞は、地獄よりすと云ふことは不可能の如く見ゆ、何となれば此場合には人は何事をも思惟し得るものと信ぜらるべければなり。されど人は其實は地獄よりするとも尙ほおのれよりする如くに思惟するなり。何故とならば、たとひ何れの源よりするとも、人の想念はおのが所有の如く、その人に思はれざるべからずと云ふこと、是れ主より各人への賜ふるに由る。然らざれば彼は人間として生息せざるべし、また地獄より導き出して、天界に到らしむるを得ざるべし、即ち改悛するを得ざらん、こは上來屢説ける

所の如し。故に主はまた人をして、彼もし惡にをれば、是れ地獄にをるものなること、彼もし惡より思惟すれば、是れ地獄よりして思惟するものなることを知り、且つこれより思惟するを得せしめ給ふ。主はまた人をして、如何にせば地獄より遁れ出づるを得べく、また如何にせば、地獄よりして思惟せざるを得べく、以て天界に入り、そこにては主よりして思惟し得べきかを考慮せしめ給ふ。而して主はまた人に撰擇の自由を與へ給ふものとす。これによりて、人はおのれよりして惡と僞とを思惟し得べし、また此は惡なり、彼は僞なりと思惟し得ることを明らむべし。故にまた彼がおのれよりして此くなし得るは、外觀(即ち影像)に過ぎず、而して此外觀なくしては、人は人たることなかるべきこと明らむべし。此眞理によりて思惟するは眞實に人間的にして、従ひて天人的なり。その眞理とは、人はおのれよりして思惟せざること、されど外觀上全く此の如く見ゆるは、是れ主よりせる賜なりと云ふこれなり。

第三項。かく信じ、かく思惟せんことは、主の神性を是認せざるもの、また惡を罪と、是認せざる者にとりてこそ、不可能なれ、此二事を是認するものには、可能なるこ

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

と。主の神性を是認せざるものにとりては、このこと可能ならざるは、主のみ人をして思惟し、意志するを得せしめ給へばなり。然るに主の神性を是認せざるものは、主と相分離せるが故に、おのれよりして思惟すと信ずるなり。また惡を以て罪なりとは認せざるものにとりて、この事不可能なる所以は、彼等は地獄よりして思惟すれば也。而して地獄に在るものは、みなおのれよりして思惟すと思へり。されど、このこと、かの二事を是認するものとしては、可能なることは、上來充分に設ける所よりして分明なりとす(二百八十八より二百九十四)。

第四項。この二事を是認するものは、只その心の中にある惡を省察し、而して惡を罪として之を避け、之を嫌忌する限り、惡をして其の由りて來れる地獄へ退却せしむること。惡は地獄よりし、善は天界よりするを、誰か知らざらんや、また知る能はずとせんや。故にまた人にして惡を避け、之を忌み嫌ふ限り、彼は地獄を避け、之を忌み嫌ふものなることを誰か知り能はざらんや。故にまた何人にて惡を避け、之を忌み嫌ふ限りは、彼はそれをも惡を意志し、善を愛すること、従ひてまたそれだけ主によりて地獄より導き出され、天界に到らしめらるるものなることを、誰

か知る能はざらんや。最も理性の人にして、天界あり、地獄あり、惡も善も、各其處より起るを知らば、今こゝに記述せる所を見得すべきわけなり。然るに今人にしてそのおのれに存する諸惡を省察し、即ち是れ自ら點檢するなり、之を避くるときは、則ちこれ地獄より出離して、之を後に捨て去りたるもの、自ら天界に赴き、そこにて主をわが面前に見るもの也。今人自らこれをなすと云ひたるが、そは外觀上おのれよりする如く見ゆるも、その實は主よりする也。人もし善心と信心とよりして、此眞理を是認するときは、この眞はその後おのれよりする如くに思惟し、行動する一切の事物の中に在りて、その最も内奥の處に密在すべし、猶ほ種子の中における生殖の力の如く、此力はその發育に伴ひて、また新たな種子を生ずるまで、その内に潜みて離れざるべし、また一たび味ひてその滋養品なることを知れる食物に對する食慾の樂しみに似たり。一言に云へば、此眞は人間一切の想念及び行動における中樞なり、精神なり。

第五項。かくて神慮は何人にも、惡をも、善をも、取れ入れしむるとなし、只今、本具の智慮によりて、何れをも取り入るること。こは上來の所述よりして推知すべし。

神慮は人をして善をも惡をもその心に取り入れしむることなし……

善は神慮の目的なり、故に神慮はこれを一切の運爲の上に盡し給ふ、故に神慮は何人にも善を分與せず何となればかくすれば善は功を求むるためのもとなるべければなり、また何人にも惡を分與せず何となれば、かくすれば、神慮は人をして惡に對して有罪なるものとならしめ給ふべければなり。されど人はその自我の念よりして何れをもなすべし、そは此我執の念なるものは只是も惡なれば也。その意志に屬する我執は自愛なり、その智性に屬するは、おのれ本具の分別識に對する我慢なり、而しておのれ本具の智なるものは之れより出で來る。

人は悉く改悛し得べし、宿命など云ふものはこれなきこと。

きこと。

三百二十二。健全なる理性に従へば、人はすべて天界に赴くべくして、地獄にはあらざることを知るべし、何となれば、われらすべて人間と生れたるが故に、その中に神の面を宿せばなり。人の中に宿れる神の面影とは、眞を會し、善を行ずるを得る力の人に存するを謂ふ。眞を會する力は神智より來り、善をなす力は神慮より來る。此力は神の面影なり、健全なる心を有する人に宿れり、拭ひ去るを得ず。人の社會的となり、道德的となり得る所以は此に在り、而して社會的となり、道德的となり得るものは亦靈的になり得べし、何となれば社會的なるもの、道德的なるものは靈的なるものに對して所受の器となれば也。社會的人間とはわが所屬せる王國の法律を知り、之に従ひ生息するものの謂、道德的人間とは此法律をわが行儀道德の基礎とし、道理によりして之と一致せる生涯を營むものの謂なり。われは今社會的、道德的生涯は如何にして靈的生涯の所受の器なるかを説くべし。人も

人は悉く改悛し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

しかの律法を以て、常に社會的、道德的なりと見做すのみならず、またこれを神的律法と見るときは、その人こゝに靈の人となるべし。法律によりて殺人、姦淫、偷盜、僞證、及び他人の權利侵害を禁ぜざるほどに野蠻なる國民はあらず。社會的、道德的人間は善良なる市民たらんため、或はかく見られんため、此等の律法を守るべし、然るに今此人これを見て以てまた神的なりとなさざるときは、社會的、道德的なる自然の人たるに止まる、されどこれを神的なりとすれば、彼は社會的、道德的なる靈人となるべし。その相違する所は、後者は常に地上の王國における善良なる市民なるのみならず、亦是天界の王國における善良なる市民なれども、前者は只地上の王國における善良なる市民にして天國にはあらず。彼が此善行によりて其差を見るべし。社會的、道德的、自然的、自然人がなす善は、そのままには善にあらず、人と世間と其中に在ればなり。されど社會的、道德的靈人が行ずる善は、そのままに善なり、主と天界と其中にあればなり。

これによりて、人は各社會的、道德的、自然的、自然となるべきやう生れたるが故に、亦社會的、道德的靈人となるべきやう生れたるや分明なり。かくなるには、只神を是認

して、その惡を行ぜざるは、惡は神の意にあらざるが故となし、またその善を爲すは、善は神の意に稱へるが故となさば、則ち足れりとす。此の如くにして、靈的なるものは、その人における社會的、道德的、事物の中に入り來りて、このものに生命あり、然らざれば、此の中に靈性を缺くが故に、そのものには生命なし。故に、自然人は、社會上、道德上如何に善なるも死せりとなし、靈人は活けりとす。如何なる國民にも何かの宗教あらんことは、主の神慮に出づ、而して各宗教が最も始めの事となさば、神ありと云ふことを是認するに在り、何となれば、これなければ、呼んで宗教となすべからざれば也。而してその宗教に従ひて生息する國民、即ち惡をなすはその神に背くものとして、之を爲さざるものは、その自然性中に何かの靈性を受け入るるものとす。もし人あり、異教徒中に、われは某の惡事、これの惡事を爲さず。そは神の意に背けばなりと云ふを聞かば、その人は心の中に、彼豈に救はれざらんやと云ふなるべし。而して此く思ふより外あらざるに似たり、彼は健全なる理性によりてかく命ぜらるなり。之に反して、此に基督教徒ありて、われはその惡、これの惡と云つて心を煩はすことなし、神の意に背くとは、是れ何の義ぞと曰はゞ、之をきくも

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

の其心の中に、彼果して救はるべきかと曰はざらんや。かゝる救済は不可能に似たり、かく思ふはこれまた健全なる理性の命ずる所なり。彼更に「われは生れて基督教徒なり、洗禮を受けて、主を知れり、聖言を讀めり、また聖餐の式に列れり」と云ふも、此の如きは、其人にして殺人、またはこれに到るべき復仇の念、姦淫、竊盜、僞證、虚言、その外種々の悪行を罪業と思はざることあらんには、何等の効ありとせんか。此の如き人は、神または永遠の生命につきて思惟すとせんか。はた此の如きもの實に在りと思ふことあるか。此の人を以て救ふ可からずとなすは、健全なる理性の命ずる所にあらざるか。

基督教徒につきてかく言へるは、その生涯の上において神につきて思惟すること、は基督教徒よりも異教徒を以て優れりとすればなり。されど此點につきては、次の順序によりて説く所あるべし。第一、造化の目的は人類よりして天界を作るに在ること。第二、故に、神慮よりして、人は皆救はるべき可能性を有すること、而して神を是認し、善き生涯を送るものは救はるること。第三、もし救はれずとすれば、その過は人間に在ること。第四、かくして、すべてのものは天界に赴くべき宿因あり、地

獄には行かざるべきこと。

三百二十三(第一)。造化の目的は、人類よりして、天界を作る、こと。天界は、人と生れたるもののみより成れることは、天界と地獄に示せる如し、また上述せる如し。かく天界は他のものよりして成らざるが故に、造化の目的は人類よりする天界にあることを知るべし。これ即ち造化の目的なることは、上來既に説述したるが(二十七より四十五)尙これを詳かにせんため、次の諸項につきて説くべし。(一)人はみな永遠に生息するやう造られたること。(二)人は皆永遠に生息して幸福の情態に在るやう造られたること。(三)かくて人は皆天界に赴くべきやう造られたること。(四)神愛は之を願ふの外なきことを得ざること、而して神智は之が準備をなすの外なきことをなさざるを得ざること。

三百二十四。これによりて見れば、神慮は天界に赴くべき宿因を有するものにして、また然らざるを得ざるが故に、こゝに前掲の順序によりて、造化の目的は人類よりする天界に在ることを證せざるべからず。

第一項。人は皆永遠に生息するやう造られたること。「神愛と神智」中、第三篇と

人は悉く改悔し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

第五篇とに人には皆三級の度ありて、之を自然度、靈度、天度と云ふこと、是等三級の度は實地に各人に存すると、されど動物には生命の度唯一つありて、そは人間の自然度なるものに似たることを説けり、これより推して、人は動物と異なりて、その生命の度を向上せしめて、主に至らしむれば、神愛に所屬の事物を理會し、また神智所屬の事物を意志し得べき情態、即ち神性を受くるに足るべき情態を實現し得ることを知るべし。而して神性を受けて、これをわが心の中に見得し、覺知し得るものは、主と和合する外なかるべく、この和合によりて永遠に生息するより外なかるべし。主もし、おのが面影と形像を造りて、之にその神性を傳ふることをせずば、主は宇宙におけるすべての造化に對して如何なる關係を有せんとするか。もし此の如くならずば、主は萬物をして或は有とし、或は無とし、或はこれに存在を與へ、或は之が存在を奪ひ、自らは遠く隔りたる處より、舞臺の上における如く、場面の變化して、斷えず光景の同じからざるを靜かに觀察するものに過ぎざるべし。もし此の如き事物にして、神性を一層密接に受けて、之を見、之を感じ得べき從臣として役立つを其目的とするにあらざれば、其中に何等の神性ありとすべきか。而して神性は

榮光の無盡藏なるが故、彼はすべてこれをおのれにのみ保有し給ふとせんか、否、彼果しこれをよくし得べきか。何となれば、おのれにあるものを他に傳へんと願ふは、否、出來得る限り、おのれにあるを他に與へんと願ふは、是れ愛なればなり。

さらば無限の神愛は何を爲さざるべからざるか。與へて、また奪ふことありとせんか。こは當さに死すべきもの、即ちそのまゝには内性無なるものを與ふるなりと謂ふべからざるか。何となれば、そのもの死するときは無となるべし、これをして如實に存在せしむるもの、その中に存せざれば也。されど神愛が與ふる所は、如實に存在するもの、決して滅亡せざる所のものなり、これ即ち永遠なるものなり。各人をして永遠に生息せしめんため、その中に死すべきものを取り去らるべし。死すべきものとは上の物質的身體なり、こは死するとき取り除かる。かくしてその不死の部分、即ちその心は赤裸々となり、そのとき人間の形式を有する精靈とならん、その心は即ち是の精靈なり。人の心の死すべきものにあらざることは、古來の聖人、即ち智者の見得せる所なり、彼等曰ふ、心即ち精神にして、既に智慧を獲得する力ありとせば、これを以て如何にして死すとすべきかと。今日に至りては、古人

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

が此主題につきて思惟せる所を會するもの極めて少なし。されど神は智そのものにして、人は之を分有するもの、神は不死なり、即ち永遠なりと云ふことは、古人が天界よりして、その全般的覺知の上に傳へたる所なり。われは天人と物語りすることを許されたるにより、實驗上より此事につきて少しく記すべし。われは遠くの昔に住める人、洪水前に住める人、其後に住める人、主の時代に住める人、その使徒の一人、及び後代に住める多數の人と言葉を交へたるに、彼等は皆中年の人々の如く見えたり、彼等曰はく、われらは死の何たるを知らず、只その神罰として此の如きものあるを知るに過ぎずと。また善き生涯を送りたるもの天界に入るときは、世間における青年時代の如き年齢となり、永遠に至るまでかくの如くなるべし。世間に在りしとき、老い、衰へたるものも亦此の如し、老いて皺よれる婦人も少婦時代の花の姿の美しきに歸るべし。

死後人の永遠に生息することは、聖言によりて分明なり、そこには天界の生命を永遠の生命と云へり、馬太傳第十九章の二十九、第二十五章の四十六、馬可傳第十章の十七、路加傳第十章の二十五、第十八章の三十、約翰傳第三章の十五、十六、三十六、第

五章の二十四、二十五、三十九、第六章の二十七、四十六、六十八、第十二章の五十、又た生命に就ても聖言あり、馬太傳第十八章の八、九、約翰傳第五章の四十、第二十章の三十一、主又た弟子に告て曰く、われ生くれば、爾曹も生きん、約翰傳第十四章の十九、又た再生に關して説きて曰く、神は生くる者の神なり、死したる者の神に非ず、路加傳第二十章の三十六、三十八。

第二項。人は皆幸福の情態に在りて、永遠に生きんため造られたること。これは前項の結論なり、何となれば人の永遠に生きんとを願ふものは、亦人の幸福の情態に在りて活きんとを願へば也。これなくば永遠の生命も何かせん。すべて愛は他の利福を願はざるはなし、兩親の愛は其兒孫の利福を願ひ、良人の愛はその妻の利福を願ひ、朋友の愛はその友の利福を願ふ。さらば神愛は何を願はざるべからざるか。また歡喜の外に善とすべきあるか。而して神善は永遠の慶福にあらずして何か。すべて善を善と云ふは、その歡喜即ち慶福の故なり、人より受けて、吾有となるものは、呼びて善となすべし、されど是亦歡喜の源とならずば、こは不生産の善なり、そのまゝにては善にあらず。これによりて知るべし、永遠の生命は亦永遠

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

の慶福なることを。人の此情態に居るを造化の目的となす。天界に赴くもの、み此情態に居るは、主の過にあらざして人の過なり。その過は人の意志に在ることとは次に説くべし。

第三項。かくて人はみな天界に赴くべく造られたること。これ即ち造化の目的なり。されど何故に人は皆天界に赴かざるかと云ふに、彼等は地獄の諸歡樂に浸み込めばなり、而してこは天界の慶福と相容れず。天界の慶福に居らざるものは、天界に入るを得ず、何となれば彼等之に堪ふる能はざれば也。靈界に入るものは、何人も天界に上るの自由を拒まるゝことなし、されど地獄の歡樂に在るものは、こゝに至るも、その心臓悸動して、呼吸逼迫し、その生命を失ふ如くにして、苦惱煩悶甚しく、火邊に置かれたる蝗の如く、その身をひねりて、苦しむべし。何故と云ふに、相容れざるもの互に相争ふに由る。されど彼等は人間と生れて、従ひて思惟と意志との能力を有し、また言説し、行動し得るが故に、死滅するを得ず。されど彼等は、おのれの生命に屬する諸歡樂と相似の歡樂を有するものとのみ、その生涯を共にし得るが故に、彼等は送られて其徒の中に入るべし。故に惡の所屬歡樂に在るも

の善所屬の歡樂に在るもの、各その行くべき處に送りやらるべし。各人はまたその善の歡樂に在るものを惱ますことなくば、おのれが惡に屬する歡樂を享受することすら許さるべし。されど惡はその中に善に對して憎怨の情を藏するが故に、善を惱ますことを止むる能はず、故にその害を防がんとす、惡人は之を退けて、地獄におけるそれゝの本位地に送りやらる、こゝにては彼等の楽しくするところ、一轉して樂しからざるものとなるべし。されど、これがために、人には造化の始より従ひて生れながら、天界に赴くべき可能性ありと云ふ眞理を消滅すべからず。何となれば、嬰兒の死せるものも亦天界に赴かざるはなし、彼等はそこにて、教育せられ、薰陶せらるゝこと、此世における人間の如く、また善と眞とに對する情動に由りて智慧を吸收し、かくて天人となるべければなり。此世にて教育せられ、薰陶せらるゝ人の場合も亦此の如くなるべし、何となれば人にも嬰兒にも同一の可能性あればなり。靈界における嬰兒につきては、天界と地獄とを見よ(三百二十九より三百四十五)。されど何故に此世における多數の人は此の如くならざるかと云ふに、彼等はその生命の第一度、自然度と呼べるを愛して、これより退き去りて靈的とな

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

ることをせざればなり。生命の自然度をそのまゝに見るときは、自我と世間との外、何ものをも愛せざるものとす、何となれば此自然度は肉體の感覺に執着して離れず、また世間と交通すればなり。然るに生命の靈度は、そのまゝにこれを見るときは、主と天界とを愛し、また自我と世間とを愛す、されど彼は神及び天界を高さもの、主なるもの、能治のものとなし、自我及び世間を低きもの、從屬のもの、所治のものとなすなり。

第四項。神愛は、かく願ふの外なきこと、而して神智は、これが準備をなす外なきこと。眞實の神性は神愛と神智に外ならざるとは、神愛と神智とにて既に充分に説き示せるところなるが、そこにまた次のことを述べたり(第三百五十八より三百七十)、主はすべての人間の胎兒に二個の所受器を具へ給ひ、一は神愛を、今一は神智を受けしめ給ふこと、神愛を受くる器は未來に人間の意志となり、神智を受くる器は未來に智性となること、かくて主は各人に意志の力と眞を有する智性を與へ給ひたること、是なり。かく主は人の生るゝや二つの力を付與し給ひ、從ひて主は人間と共に其中に居給ふこと、猶ほ主自らに居給ふ如くなるが故に、主の神愛は、人

の天界に赴きて、永遠の幸福を樂しむことを願ふの外なく、主の神智はこれに對して準備をなすの外なきことを明らむべし。されど人は天界の幸福をおのれの所有の如くその心に感ずべしと云ふが、主の神愛なるが故に而してこれを行ふには、外觀上、人は全然おのれよりして思惟し、意志し、言説し、行動するものゝ如くならざるべからざるが故に、主は只その神慮の法則によりて人を導き得るものとす。

三百二十五(第二)。故に、神慮よりして、人は、皆救はるべき可能性を有すること、而して神を是認し、善き生涯を送るものは救はるゝこと。何人も救はるべき可能性あることは上來の所述にて明らかなり。或は以爲らく、主の教會は基督教界のみに在り、そはこゝにのみ主は知られ、聖言は存すればなりと。されど亦多數の人は信ぜらる、神の教會は普遍的にして、全世界に擴がり、各地に散布せり、故に主を知らず、聖言の存在せざる人民のうちにも之れありと。彼等は曰ふ、こはその人民の過にあらず、彼等は不覺を禁ずる能はず、等しく是れ人類と云ふべきに、地獄より生れたるものありとするは神の愛と慈悲に背けるわけなりと。かく、全部の基督教徒にあらざれども、多數のものは、教會の普遍なるを信じ、これを呼びて、交通となすが故に、

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

知るべし、教會には最も普遍なる原則ありて、各宗教の中に入り、こゝに其の交通を成ずることを。此の最も普遍なる原則と云ふは、曰く、神を是認すること、善き生涯を是認すること、是なり。こゝは次の順序にて述べべし。(一)神を是認すれば、これによりて神より人への和合あり、また人より神への和合あること、而して神を否定すれば分離を生ずること。(二)人はみなその生命の善如何によりて神を是認し、神と和合すること。(三)生命の善、即ち善き生涯を送るとは、惡を以て宗教に背くもの、從ひて神意と相容れざるものとなし、この故に惡を避くるを言ふこと。(四)これを宗教の普遍的原理となす、これによりて何人も救はれ得ること。

三百二十六。如上の諸項目は、之を箇々に點檢し、説明せざるべからず。

第一項。神を是認すれば、これによりて、神より人への和合あり、また人より神への和合あること。あるひは以爲らく、神を是認せざるものも道德的生涯を送りたるとせば、神を是認するものと同じく亦救はるべしと。彼等は曰はく、是認は畢竟何の用かある。唯想念上の事にあらずや。われもし神の存在を確實にするを得ば、そのとき、之を是認すると容易なるにあらずや。われは神につきて聞けること

あれども、われまた彼を見ざる也。われをして之を見せしめよ、われ則ち之を信ぜんと。此の如きは、神を否定するものが、之を是認するものと、自由に議論を上下するを許さるゝとき、用ゆるところの論法となす。されど神の是認は和合を生じ、その否定は分離を生ずること、わが靈界にて知れる事實によりて例證し得べし。靈界にては、何人なりとも、他のことを思ひ、これと會談せんと願へば、その人は直ちに此に現前すべし、こゝは普通の出來事にして、決して違はず。その理いかんと云ふに、靈界にては、自然界の如く隔りなるものなく、只その外觀(即ち影像)あるに過ぎざるに由る。今一つの事實は、わが知れる人を思へば、其人此に現前する如く、わが親しめる人に對する愛は、和合を生ずるものとす、此和合よりして、彼等兩人は打寄りて、親しく談話をかはし、一家或は一團體に共接し、互に相助くべし。之と反對の現象も亦あり、他を愛せるもの、殊に他を憎むものは、之と相見ることあり、相逢ふことなし、兩者の間隔は愛の缺乏の度、即ち憎惡の度によるべし。もしこの人現前することありて、その憎惡を想ひ起すときは、彼忽ちはその跡を失ふ。

此一二の實例によりて、靈界においては、現前及び和合の原因となるものは何か

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

を明にすべし。即ち現前は他を想ひ出して、彼に會はんと願ふより起り、和合は愛の情動より起ることを明にすべし。人間の心における一切の事物も亦此の如し、心の中には無数の事物あり、個々の事物悉く情動によりて、即ち甲乙間の愛によりて、連結し、和合せり。此ぎ合は靈的にして、全般的のものにありても、個體にありても、同一なり。此靈的の和合はその起源を主と靈界及び自然界との和合に發す、全般より見て、個々に見て、然らざるはなし。これによりて何人も主を知る限り、而して此智識より主を思惟する限り、主は此に現前することを明むべし。而してまた何人にも愛の情動よりして主を是認する限り、主はその人と和合すべし。之に反して人もし主を是認せずば、主はその跡を絶ち、また人、彼を否定するときは、彼此人と分離すべし。和合の結果はいかんと云ふに、主は人の面をおのれの方に向はしめ、然る後彼を導き給ふ。然るに分離の結果は、人はその面を地獄に向はしめ、然る後こゝに導かるべし。故に天界の諸天人は、太陽としての主に對してその面を向け、地獄の諸精靈はその面を主に背ける方向に轉ず。これによりて何をか神を是認すとなし。何をか神を否定するなすかを明にすべし。此れにて神を否定するも

のは、死後にも之を否定す、而して上述せる如き(三百十九)有機的組織を存するなるべし。此組織一たび此世にて出來上れば永久に保存せらるゝものとす。

第二項、人は、各々、神を是認して、その生命の善に從ひて、これと和合すること。

苟も宗教につきて何事かを知るものは、皆神を知れるなるべし。彼等はまた智識の上、記憶の上よりして神に關して言説し得べし、或はまた智性よりして神につき、て思惟し得るもあり、されど人もし善き生涯を送るにあらざれば、こは只現前を生ずるに過ぎざらん。何となれば此の人は尙神に背きて、地獄の方面に退き去るを得べければなり、惡しき生涯を營める人の場合の如し、されど善き生涯を送るにあらざれば、何人にもその心よりして神を是認し得くばあらず、而して此人の生涯に存する善の如何によりて、主は彼を地獄の方向より轉じて、おのれに向はせ給ふ。其理は、此の如き人のみ實に神を愛すればなり。何となれば彼は神よりする神的事物を愛して實地之を躬行すれば也。神より神的事物とは、神の律法における聖誠を云ふ、是聖誠は即ち神なり、何となれば神その人實に是れ自己分出の神性なればなり。而して此の如き神を愛すと云ふ。故に主曰はく、我が誠を有ちて之を守

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

る者は即ち我を愛するなり、我が誠を守らざる者は即ち我を愛せざるなり」と(約翰傳第十四章の二十一、二十四)。

十誠の表二個ありて、一は神のためにし、一は人のためにする所以は此に在り。神はその不斷の運爲によりて人をしておのが表に存する所を受けしめんとし給ふ、然らせざれば、和合行はれ難ければ也。故に二箇の表は一箇のやうに和合し、これを呼びて聖約の表と云ふ。聖約とは和合の義なり。人各、神を是認し、その生涯の善何如によりて神と和合する所以は、此善は主に存する所の善故に主より出づる所の善と相似たればなり。故に人もし善き生涯を送れば、此に和合あり。之に反してその生涯、悪しくば彼主を拒絶するが故に、分離あり。

第三項、生命の善、即ちよき生涯を送るとは、惡を以て宗教に背くもの、從ひて神意と相容れざるものとなし、この故に、惡を避くるを言ふものなること。汝もしあらゆる方法にて善を行ふとも、例令へば、教會を建立し、之を裝飾し、供養の物品を以て之を充し、病院及び慈善的收容所を保護し、毎日義捐のため金品を喜捨し、寡婦、孤兒を扶助し、宗教に關する聖を行には缺かさず參拜し、又心よりする如くに、是等の

事物につきて思惟し、言説し、説教するとも、惡を以て神に逆ふ罪業となして之を避けずば、此の如き諸善も亦偽善の行業、功を求むるの作爲に外ならざる也。何となれば、其中には尙惡の存するもあればなり、また何となれば各人の生命はそのすべて行爲の中に存すればなり。善をして善たらしめんには、これより惡を除き去るにあらざれば能はざるものとす。これよりして、惡を以て宗教と相容れず、故に神意に背くものになりて、去る故に惡を避くるは、是れ善き生涯を送るものなること明むべし。

第四項、これを宗教の普遍的原理となす、これによりて人は皆救はるゝこと。神を是認すると、而して惡は神に背くが故に之をなさずと云ふことは、宗教をして宗教ならしむる二原理にして、もし此一にだも缺けば、之を呼びて宗教となすべからず。何となれば神を是認すること、惡を行ずることは相容れざればなり。又善をなして、而して神を是認せざるも亦然り、何となれば甲なければ乙あるを得べからざれば也。到る處に何かの宗教ありて、各宗教には必ず此二つの原理の具はれるなるは、是れ神慮の然らしむるところなり。また神を是認して、而して惡は神

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

に背くが故に、之を行せざるものは、天界に一地位を占むべしと云ふも、神慮の致す所なり。何となれば神慮は之を全般より見れば、一個の人に似て、その生命、即ち精神は主なれば也。この天的人間には、自然的人間における一切のもの具はれり、只相違とする所は、天界の事物と自然の事物との間に存する相違なり。人間には、血管及び神経繊維より成れる有機的形體之を臟腑と云ふあるのみならず、皮膚あり、粘膜あり、腱あり、軟骨あり、骨あり、爪あり、齒あるは、皆人の能く知る所也。後に列擧したるものは、かの有機的形體そのものよりは、生命を有する度低し、彼等は此に對して、通路、被包、支持の用をなすものとす。天的、即ち天界にも亦皆此の如き事物を具備せんには、同宗教の人間のみを以て之を作る能はず、必ずや數多の宗教に屬する人をもとらざるべからず。故にかの教會の二大原理をその生涯の上に躬行したるものは、すべてかの天的人體中、即天界における何かの位地を占め得て、各、その度に從ひて幸福を樂しむものとす。されどこのことにつきて尙上述の所を見るべし。(三百五十四)。

此二原理は各宗教における始位のものなることは、このことの神誠にて教へら

るゝを見て分明なり、而してこの神誠はエホバがシナイ山上にも親しくその活ける音聲を以て宣傳したる所、二個の石盤の上に神の手にて親しく書されたる所なり、その後これをアークにおきて、之をエホバと呼び、タベルナクル内における最も内奥の處に据えられ、エルサレムにおける殿堂内の内宮となれり、殿堂内における一切の事物は只これのみよりして其神聖を得るものとす。聖言によれば、神誠を記したる二個の盤を收めたる舟は、フィリスチナ徒のために取り去られ、アシエドットにおけるダゴンの家におかれること、ダーゴンは其前にて地上に倒れ、その後その頭はその體より千切りられ、兩手の掌と共に、その家の入口におかれたること、アシエドッド及びエクロンの人は、その數、數千ばかりなるが、大船の故に鎌を以て打たれ、彼等の國土は鼠害のために荒廢したることまた、フィリスチン人は其國の諸侯の勸告により五箇の金鏃と五箇の金鼠と一個の新しき車を造りて車の上にアークをおき、アークの近くに黄金の鏃と鼠をおき、二頭の牝牛に曳かせて、アークをイスラエルの民衆に送り戻せること、牝牛は車の前に歩みながら鳴きたりと云ふこと、イスラエル人は此の手と車とを神への供物となしたることあり、撒母

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

耳前書第五章及び第六章。今これ等の事物は何の義なるかを表はすべし。フィリスチン人は仁より離れたる信に在るもの、義、ダゴンはこの如き人々の宗教の義、彼等が打たれたりと云ふ鐵は自然愛の義、この愛、靈愛と分離するときは不淨なり、鼠は眞を偽化して教會を荒らすの義、彼等が大船を載せて送り返したる新しき車は、新なれども自然的なる教徒の義、何となれば聖言にては、車を以て靈的諸眞よりする教説を表はせばなり、牝牛は自然的情動の善なるもの、黄金の鐵は自然的愛の清められて善となれるもの、黄金の鼠は善によりて除かれたる教會の脱離、聖言にては、黄金は善の義なり、途上にて牛の鳴けるは、自然人が有する惡の諸慾を善き情動に轉化するの難きを義とし、牝牛の車と共に全く神に捧げて焼くべき供物となしたるは、かくして主の心なだめられたることを云ふなり。此の如きを、その史的叙述における靈的意義となす。讀者よろしく立て連結して、其應用すべきところを察せよ。

三百二十七(第三)。人も、し、救はれずば、そは、その人の過なること。惡は善より善は惡より流れ出づる能はざること、是れ兩者相容れざるが故なり、從ひて善よりは

只善のみ、惡よりは只惡のみ流れ出づることは理性の人の一たび之をきけば、直ちにその眞なるを是認する所なり。此眞理の是認せらるれば、次の眞理も亦是認せらるべし、曰く、善は、之を受くるものにして、善ならず、惡なるときは、轉じて惡となるべしと。何となれば、すべての形式は其中に流れ入るものを、そのもの、性質に轉化すればなり、こは上述の如し(二百九十二)。然るに主はその眞實性において善なり、即ち善そのものなるが故に、惡は主より流れ出でざること、また主によりて作り出されざること、分明なり。只之を受くるものにして惡の形式を有するときは、その善化して惡となるべし。人はその自我より見れば實に此の如き主體なり、かの自我は主よりして斷えず善を受くれども、これをわが本來の形式、即ち惡の形式に入れて、そのもの性質に轉化することを止めず。故に知るべし、人の救はれざることあるは、その人の過なることを。惡は誠に地獄よりす、されど人之を受けておのが所有の如くになすが故に、而してかくしておのれに取り入るゝが故に、惡は人間よりすとも、また地獄よりすとも云ひ得べからん、何れにしても同じことなり。されど惡を取り入れたる結果、遂に宗教の滅亡を見ることあるは、何れの處よりする

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものは、これなきこと

かと云ふことを示さんため、以下次第を逐ひて説くべし。(一)時代を経るに従ひ、各宗教は衰微し、滅亡に至ること。(二)各宗教は人に存する神の面影を轉倒するよりしてその衰微と滅亡とを來たすこと。(三)こは代々を逐ひて遺傳的惡の斷えず増長するより起ること。(四)されど主は各人をして救はるべき可能性を有するやうに用意し給ふこと。(五)新しき教會起りて、古來の教會の類廢せるに代るべきこと、是れまた主の用意なること。

三百二十八。是等の諸點はその次第を逐ひて證明せんこと要す。

第一項。時代の進むに従ひ、各宗教は衰へて、亡ぶること。此地上には數多の教會ありて、興敗相繼げり、そは人類の存在するところ教會亦在ればなり。造化の目的たる天界は、人類より成ることは、上述の如し、而して何人も教會の大原理を有するにあらざれば、即ち神を是認し、善き生涯を送るにあらざれば、天界に入るを得ざること、是亦上述の如し(三百二十六)。故に知るべし、太古の時代より今日に至るまで、此地上には數多の教會ありしことを。此等の諸教會は、イスラエルとユダヤの教會の外は歴史的ならざれども、聖言に皆記されあり、即ち此の二教會に先ちて他

に教會ありしことは、聖言に國民の名稱、個人の名稱及び彼等に關する個々の事實によりて記述さるゝなり。最太古の教會、こは第一に起りたるものなるが、アダム及びその妻のイヴによりて之を叙せり。次に起れるは之を呼びて太古の教會となすべし、ノア及びその三人の子、及びその兒孫によりて之を叙せり。此教會は廣く行はれて、亞細亞の諸國に涉り、ヨルダン河の兩岸にあるカナンの地、シリア、アッシリア、カルデヤ、メリポタシヤ、エジプト、アラビヤ、テイル、シドンに擴がれり、この國民の中に太古の聖言存しき。此教會かく各地に行はれたることは、聖言中豫言に關する部分に記せる所を見れば分明なり。されどエベルのために目覺しく轉化せられ、希伯來教會はこれより起れり、此教會にて犠牲の聖式始まれり。希伯來教會よりイブラヘル教會、ユダヤ教會起れり、聖言はこゝに至りて記されたるが故に、その勃興の勢は壯嚴をきわめたり。ネブカトネサーが夢に見たる偶像は、此四教會の義を表はす、此の像の頭は純金にて、その胸と腕とは銀、その腹と股とは銅、その脚と足とは鐵と泥土なりしと云へり、但以理書第二章の三十二、三十三。古への學者が謂ふ所の黄金、銀、銅、鐵時代なるものは亦此義に外ならず、基督教會がまだ教

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと。

會に續いて起れるは、能く人の知る所なり。

聖言よりして、また是等の諸教會は時の進むにつれて衰微し、終焉の時期到着して此にその滅亡を告ぐるに至れることを知るべし。最太古の教會の滅亡は智識の樹の實を食ひたるより起れり、即ちそのれ本具の分別識に對する我慢によりて滅亡せり、洪水は此義をあらはせり。太古の教會の滅亡は、諸國がさまざまに頽廢に歸せると見て知るべし、こは聖言の歴史的部分にも、豫言的部分にも共に記せる所、殊に諸國がイスラエルの子孫によりてカナンの地より放逐せらるゝ處を見るべし。イスラエル及びユダヤの教會の滅亡はエルサレムの殿堂の破毀にて之を表はせり、またイスラエルの人民を永久の繫目となして運び去られたること、ユダヤ人がバビロンに送りやられることにて之を示せり。この滅亡は豫言者中及び但以理書第九章二十四—二十七處々に之を前言せり。されど基督教會が次第に頽廢して、その終焉に近づくべきは、主之を馬太傳第二十四章、馬加傳第十三章、及び路加傳第二十一章に記し給へり、滅亡そのものは黙示録に之を述べあり。これによりて教會は時の進むにつれて衰亡すること、及び宗教に於けるも亦此の如きことあるを明むべし。

第二項。各宗教は、人に有する神の面影を、轉倒するによりて、衰微し、滅亡すること。人は神の形像に似せてその面影と造られたることは人の能く知る所なり。されど今此に神の面影、神の形像とは何のことなるかを説くべし。唯神を愛とし、智となす。人は此二つを受けんために造られたり、その意志は神愛を受け、その智性は神智を受くる器なり。この二つのものは造化の始めより人間に存し、人をして人たらしむるものなること、また始に於ける孫兒中に形成するものなることは、既に上述せり。故に人は神の面影なりとは、人は神智の所學者なりとの義、神の形像なりとは、神愛の所學者なるの義なり。故に智性と云へる所受器は之を神の形像と云ひ、意志と云へる所受器は之を神の面影と云ふ、かく人は所受器として造られ、形成せられたるが故に、知るべし、人は其意志によりて神より愛を受け、その智性によりて神より智を受くるやう造られ、形成せられたることを。而して人々のものを受くるは何れるときかと云ふに、神を是認して、その神誠によりて生涯を營むるとき也。されどこれを受くるに多少の度あるは、宗教よりして神とその神誠と

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

を知るの度従ひて諸眞理を知るの度に比例するものとす。何となれば眞理は人に神の何ものたること、神は如何にして是認すべきこと、またその神勅とは如何、人は如何にして之に従ひて生息すべきかを教ふればなり。

人に有する神の面影及び神の形像は一見破毀せられたる如くなれども、其實は破毀せられたるにあらず、何となれば此二つものは人が有する二能力、即ち自由性との中に植えつけられて、此に有すること、上來屢記す所の如くなればなり。その一見亡びたる如くなるは、人、その神愛を受くべき器、即ち意志をして、自愛の所受器となし、神智を受くべき器、即ち智性をして、わが本具の分別識を受るの器となしたるときに在り。かくの如くして、人は神の面影と形像とを轉倒したり、即ち此の所受器をして神より背き去らしめておのれに向はしめたり。此理によりて、此器はその上方を閉ぢ、下方を開けり、即ち前方を閉ぢて後方を開くる至れり、而かも造化の始めにはその前方は開き、その後方は閉ぢ居たる也。此の如く彼等は開閉すべき處を轉倒したるにより愛の所受器たる意志は地獄即ち自我より流入を受くるに至れり、智の所受者たる智性も亦此の如くなり了りぬ。この結果として、教會に

は神を崇むる代りに人を崇むること始まり、眞實に教説に基づける禮拜の代りに偽りの教説に基づける禮拜起れり、前者は人間本具の分別識よりし、後者は自我の愛よりす、これによりて、時進むに従ひ人に有する神の面影は轉倒して此に宗教の衰微と賤劣とを來すことを知るべし。

第三項。こは代々を逐ひて遺傳的惡の斷へず累進するに、よるものなること。

さきに遺傳的惡は、アダム及びその妻なるイヴが智識の樹の實を食ひたるより起りたるにはあらざること、こは兩親よりその子に代々を経て傳はり、移し植えられたるものにして、世を重ねるに従ひて斷えず増長し行くものなることを説き示したり。かくの如くにして惡、多數の人のうちに増進するとき、益、擴がり行きて、他人にも及ぶべし、そはすべての惡には他を邪路に迷はしめんと、の熱愛あるが故なり、あるものありては善に對する怒り炎の如く燃ゆるもあり。故に惡の感染と云ふ教會における高位を占むるもの、その首領となり、統御者となるものにして、この惡に感ずるときは宗教は轉倒すべし、之を癒すもの方術たるべき眞理も亦偽化せられて、その眞を失ふべし。これよりして教會における善は次第は減退し、眞

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

は頽廢して、遂にその滅亡に了るべし。

第四項。されど、各人を救はるべき可能性を有せしむるやう、主は意を用ひ給ふこと。到る處に宗教あるべく、また宗教には救済の二大原理具はるべきは、主の用意に由るものとす。二大原理とは神を是認すること、惡は神に背くの故を以て、之をなさざること、是なり。此以外の事物にして、智性、従ひて想念に屬する信仰箇條と云ふべきは、各人がその生涯の如何によりてそれらに獲得する所なり、そは皆生命に對する附屬物なればなり。もしこれをして主要なる原理の前におくときは、何等の生命をも得ざるべし。また主は善き生涯を送り、神を是認したるものをして死後、天人によりて教へらるゝやう取り計ひ給ふ。そのとき此世にて宗教の二大原理を有したるものは、聖言にある如き、教會の諸眞理を受認し。主を天界及び教會の神と是認すべし。彼等の之を受くるは、かの基督教徒にして、主の人性をその神性より離したる概念を此世より持ち來りたるものに比して、一層容易なり。主はまた幼時に死せるものは、すべて、その生處の如何を問はず、救はるべきやう取り計ひ給へり、また死後には各人に出來得べくは、その生涯を改むべき機會を與へ給

ふ、彼等は天人を通じて主によりて教へられ、導かるべし、而るに彼等は今や死後の生涯に入れるもの、天界と云ひ、地獄と云ふ處ありと云ふことを知るが故に、最初のほどは眞理を受け入るべし、されど此世にて神を是認せず、惡を罪業として避けざりしものは、少時にして眞理を厭ひて退轉すべし。かの唇頭のみにて之を是認し、その心にて然かせざりしものは、かの油なき燈を携へ、他に向ひて油を乞ひ、また去りて之を買ひ求めてたるも、而かも婚姻の筈に入るを許されざりし痴女と同じ、燈とは信所屬の諸眞の義、油とは仁所屬の諸善の義なり。これによりて、各人は神慮によりて救はる可能性あり、而かもその救はれざることあるは、その過ち人にあること分明なり。

第五項。新たなる教會起りて、前來、頽廢せる教會の跡を襲くべきやう、主は、その意を用ひ給ふこと。こは最も太古の時代より然りしなり、即ち前の教會は亡びて次の教會之に代りしなり。太古の教會は最太古の教會に次ぎて興り、この後にイストラエル、即ちユダヤ教會あり、また之に次ぎて基督の教會あり。默示録の豫言によれば、新しき教會ありて之が跡を襲くべきなり、天界より下れる新しきエルサレ

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

ムとは此義を現はせるなり。

三百二十九(第四)。かくして總ての人は、天界に赴くべき宿因あり、地獄へにはあ
らざること。主は何人をも地獄に投げ給はず、精靈自らそこに下ることは、天界と
地獄にて記せり。こはすべての悪人及び不信心者が死後になす所なり、また此世
にてもなす所なり、その相異とせる所は、この世に在るうちには彼等改悛の期あるべ
し、救済の方便を守りて、之をその心に浸みこますを得べけれど、この世を去りて後
は、しかするを得ず。救済の方便とは次の二項に關係するものとす、即ち惡は神誠
の十則における神の律法に背くが故にとて之を避ること、及び神ありと云ふとを
是認する、是なり。こは惡を愛せざるもの、すべて爲し得るところなり、何となれ
ば、主は斷えずその人の意志の流れ入りて、惡を避くるの力を彼に與へ、また其智性
に流れ入りて、惡を避くるの力を彼に與へ、また其智性に流れ入りて、神なりと云ふ
ことを思惟する力を彼に與ふべければなり。されど何人も甲を行ふに當りて同
時に乙を行ふにあらざれば、その何れをも行ふを得ず。此二つは神誠のテーブル
が和合せる如く和合するものなり、神誠のテーブルの一つは主のためにし、今一は

人のためにす。主はそのテーブルよりして各人を覺照し、彼に力を與へ給ふ、され
ど人がこの覺照を力とを受くるは、おのれのテーブルにある事物を行ずる度如何
によれり。これ以前は、二個のテーブル相重なりて、封じたるが如し、されど人にし
ておのがテーブルにある事物を行ずるに従ひて、その封、解けて開くべし。

今日に在りては、神誠は嬰兒或は小兒の手にてのみ開閉せらるる一小冊子に過
ぎざるが如くならずや。年長けたるものに向ひて試みに云へ、そは神誠の十則に
背けるが故に、之を行ずるなかれと。而して彼果して汝に聞くとせんか。されど
汝もし彼に向ひて、こは神の律法に背くが故に、之を行ずるなかれと云はば、彼は或
は汝に聞かん。而かも神誠十則は即ち神の律法そのものに過ぎざるなり。靈界
にて多少の人に就きて實驗行はれぬ、そのとき神誠の十則まではカタキズムを讀
み聞かせたるに、彼等は輕侮の念を以て之を排斥したり、その理は、第二のテーブル
における神誠、即ち人に對しての分は、諸惡のさくべきとを教ゆればなり。而して
或は不信心の故か、或は事業は何等の用をもなさず、唯信のみ是尊しと云ふ宗教上
の信仰によりて諸惡を避けざるものは、神誠又はカタキズムをきくときは之に對

人は悉く改悛し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

して輕悔の念を抱く、猶ほおのれには復た何の用もなき小兒の書物の事を聞くもの如し。かくの如き事をこゝに記せるは、何人にも救はんと願はゞ、救はるべき方便は知れをらざるにあらず、また其力もなきにあらざることを知らしめんためなり。是に由りて知るべし、何人も地獄にはあらずして、天界に赴くべき宿因あることを。されど或る人は人間を以て救濟せられざるべき宿因あり、即ち人は本來責罰を受くべきものなりとの信仰を抱くが故に、而して此信仰は破壊的なるも道理によりて其の狂亂殘忍なることを示すにあらざれば、之を除き去るを得ざるが故に、次の順序によりて、之を説くべし、(一)天界に到るべき宿因以外の説は、すべて神愛及び其無限性と相容れざるものなること。(二)天界に到るべき宿因以外の説は、すべて神智及び其無限性と相容れざること。(三)教會のうちに生れたるもののみ救はるべしと思ふは狂的邪説なること。(四)人類に責罰の宿因を有するものありと思ふは殘忍なる邪説なること。

三百三十。普通に知らるる如き宿因を信ずるは、如何に有害なるかを分明にせんため、此四つの項目につきて論證せざるべからず。

第一項。天界に赴くべき宿因以外の説は、悉く無限なる神愛に背くこと。エホバ、即ち主は神愛なること、主は無限にして一切生命の眞實在なること、また人は神の形像によりて、その面影をして造られたることは、神愛と神智にて説ける所なり。而して人は各母胎にあるとき、主の形像に従ひて、その面影に形づくらるること、これまた既に記せる所なるが故に、知るべし、主は一切の人の天父にして、人はすべて主の靈子なること。故に聖言には、エホバ即ち主はかく呼びなされ、人も亦かく呼びなさるる也。主曰く、地にある者を父と稱ふること勿れ、爾曹の父は一人すなはち天に在す者なり」と、馬太傳第二十三章の九、此義は、生命の上より見て主のみ父なること、地上の父は只此生命の被覆、即ちその肉體より見て父なるに過ぎずと云ふに在り。故に天界にては主の外に父と名づけらるるはあらず。此生命を逆轉せざる人々を以て主の子となし、主より生れたるものとなすことは、また聖言における多くの文句より分明なり。故に知るべし、神愛は各人、即ち惡人にも、善人にも有することを、従ひて主即ち神愛は彼等に對しては、地上の父がその子に對する如くなるより外なきことを、否、神愛は無限なるが故に、そは亦無限に然ることを見るべ

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

し。また各人の生命は主よりするが故に、主自ら各人より退き去ることなきを知
るべし、主は悪人より退き去るが如く見ゆれども、こは悪人自ら主より退き去るに
外ならず、主はその愛よりして尙彼を導き給ふ、故に主は曰はく、求めよ、然らば與へ
られ、尋ねよ、然らばあひ、門を叩けよ、然らば開かるゝことを得ん、爾曹のうち誰か其
子パンを求めんに石を與へんや、然らば爾曹惡き者ながら善き賜を其子に與ふる
を知りまして、天に在ます爾曹の父は、求むる者に善き物を與へざらんや」と馬太傳
第七章七十一、また曰はく、天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義き者に
も義からざる者にも降らせ給へり」と馬太傳第六章の四十五、主は一切の救済を願
ひ、何人の死滅をも願はざることは、教會の能く知れる所なり。これによりて天界
に赴くべき宿因以外の説は神愛と相容れざるを明にすべし。

第二項。天界に赴くべき宿因以外の説は、すべて無限なる神智に背くこと。神
愛はその神智によりて、各人の救はるべき方便を準備し給ふ、故に天界に赴くべき
宿因以外の説を立つるは、是れ神智を以て救済を試験すべき方便を準備し能はず
となすものなり、されど人は皆此の如き方便を具ふることは上述の如し、而してこ

は無限なる神慮よりして存するもの也。されど何故に救はれざるものありやと
云ふに、神愛はまづ人のその心の中に天界の幸福と慶福とを感受せんと願ふ、これ
なくば、天界もその人にとりては天界ならざるべし。而してかくならんには、人は
おのれよりして思惟し、意志する如く見えざるべからず、何となれば此外觀なくし
ては、何ごとをもその人に取り入れらるることなく、その人も亦人たる所以を失ふ
べければなり。されど、こは一切の人が地獄にあらず、天界に赴くべき宿因を有す
と云ふ眞理を消滅することなし、されど救済の方便具はらざらんにはかくなるこ
とあらん、されど救済の方便はすべての人に備はること、天界は、その人の宗教の如
何を問はず、善き生涯を送るものは、皆それらの位地を備ふることは既述の如し。
人は各種の果實を生ずる土地の如し、土地の土地たるは此力あればなり、土地は有
害の果實を生ずれども、之がために善果を生ずるの力を消滅せず。されど土地に
して只有害の果實のみを生ぜんには、此の如きことあるべし、人はまた光線を色々
に變化さする物體の如し、もし只不快の色を生ずるとも、その原因は光にあらず、光
線はまた快心の色を生ずるやうに變化し得ればなり。

人は悉く改悔し得べし宿命など云ふものは、これなきこと

第三項。教會のうちに生れたるもののみ救はると云ふは、狂亂の邪説なること。教會の外に生れたるものも亦人なることは教會のうちに生れたるものに異ならず、同じく其起原を天界に有せり、等しく是れ生ける精神にして不死なり。彼等は亦宗教を有し、之よりして神あることを是認し、またよき生涯を送らざるべからざることを是認せり。而して神を是認し、よき生涯を營むものは、その處に比例して靈的となり、救はるることは前述せり。駁するもの曰ふ、彼等は洗禮を受けず、されど洗禮は何人をも救はず、靈的にまづ洗滌せられんことを要す、即ち復活せんことを要す、何となれば洗禮はこれが徽章なり記念なれば也。また曰ふ、主は彼等の知る所にあらず、而して主なくしては救濟あらずと。されば主を知るの故を以て何人も救はれず、まづ主の命に服して生活せざるべからず。神を是認するものは、皆主を知れり、そは主は天地の神なること、主自ら馬太傳第二十八章十八及び他處に教へ給へば也。また、教會の外に在るものは、神を以て人間なりとの考を有せり、基督教徒よりも此概念多し。而して神の人間なることを知りて善き生涯を送るものは主之を受けおさめ給ふ、そは彼等、神の人格においても實性においても、一なるこ

とを是認すればなり、而して基督教徒は之をなさず。彼等はまたその生涯の上に神を思ふ、そは彼等は諸惡を以て神に逆ふ罪業となし、而してしかなすものは、その生涯の上に神を思ふものなればなり。

基督教徒は聖言よりして宗教の聖訓を有せり、さればこれよりして生涯上の訓戒をひき出すものは極めて少なし。羅馬教徒は之を讀誦せず、新教徒は仁を離れたる信仰を是として、神誠中にその實際上の生涯に關するものあるを顧みず。而かも聖言は實地の生涯に對する教徒に外ならざる也。基督教は只歐羅巴にのみ行はる、回々教及び異教徒の宗旨は亞細亞にあり、印度、亞弗利加及び亞米利加に在り、地球上この部分に住める人類は基督教國におけるものに十倍せり、而して此基督教國に宗教を實地の生涯におくもの少し。さればこの後者のみ救はれて、前者は悉く罰せらるると云ひ、人の天界を有するは、その生れによりて、その生涯によらずと云ふは、狂惑の極ならずとせんや。故に主曰はく、われ爾曹に告げん、多くの人々東より西より來りてアブラハム、イサク、ヤコブと偕に天國に坐し、國の諸子は逐出さるべしと(馬太傳第八章の十一、十二)

人は悉く改換し得べし宿命など云ふものはこれなきこと

第四項。人類に神罰を受くべき宿因を有するものありとなすは、残忍なる邪説なること。そは愛そのもの慈悲そのものなる主を以て、此の如き衆多の人類を悉く地獄に入れんため生れ出でしめたりとなすこと、幾千萬と云ふ數を知らぬほどの人々が生れながら神罰を蒙り、呪咀を受くるもの、即ちサタンと生れ、悪魔と生れたりとなすこと、及び主を以てその神智によりて、善き生涯を送り、神を是認するものを永遠の火に投げこまれ、惱を受けざるやうに用意し得ざりしとなすことは、残忍なる思想なればなり、主は一切の創造者として、救済者なり、彼れのみ一切を導く、何人の死滅をも願はず。故に曰ふ、此の如き衆多の國民、人類が主の保護、監督の下にありながら、悪魔の餌として引渡さるべしと信じ、且つ思惟するは残忍なりと。

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は、此の如くなるときは、その神愛と神智とに逆ふ故に、おのれに逆ひて行動するものなればなること。

三百三十一。「神愛と神智」に、主は神愛と神智なること、此二つは實在そのもの、生命そのものなること、これより一切は存在し、生活することを説きたり、また同じきもの主より分出し、此分出の神性は主自らなることをも説きたり。主より分出するものにて、その始めをなすは神慮なり、何となれば神慮は宇宙の造られたる目的の中に、斷へず存すればなり。方便を通じて目的の運爲し、進行するを神慮とは名づけたるなり。然るに今分出の神性は主自らにして、神慮は分出中の元始なるが故に、知るべし、主の神慮の諸法則に逆ひて行動するは、おのれ自らに逆ひて行動するものなることを。また神は秩序なりと云ふが故に、主を神慮なりとも云ひ得べからんか。何となれば神慮は則ちまづ人間の救済に關する神的順序なれば、而し

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

て秩序は法則なくして存在するを得ざるが故に、それは法則即ち秩序を作り、またその法則は秩序によりて、その亦秩序なる事實を演繹すれば也、之を推して知るべし、神は秩序あるを以て、彼は亦おのれ自らの秩序の法則なることを。神慮につきて亦しか云ひ得べし、主はおのれ自らの神慮なるが故に、亦おのれ自らの神慮の法則なりと。故に主はおのれ自らの神慮の諸法則に背きて行動する能はざることを、何となれば、かくするはおのれに逆ひて行動するものなるべければなり。また對境なくしては行動あるを得ず、而して此の行動は手段によらざるべからず、對境なく、また由りて働くべき手段なくしては、行動は不可能なり。神慮の對境は人間なり、その手段は神眞之によりて人に智慮ありと神善之によりて人に愛ありとあり。神慮はその目的に向ひ此手段にて作爲す、目的とは救済即ち是なり。そは目的を遂げんと願ふものは、またその手段を思ふべければなり。作爲することあるは、目的のために作爲するなり、而して之を爲すに手段あり。されどこは次の順序によりて檢せらるるときは、一層の明白を加ふべし。第一、人を救はんと神慮は、その運爲を人の生るるときに始め、その生涯の終に至るまで繼續し、それより後は永遠

に至ること。第二、神慮の運爲は純一無雜の慈悲よりせる手段方便によりて斷へず行はるること。第三、直接の慈悲よりする瞬時の救済は不可能なること。第四、直接の慈悲よりする瞬時の救済は教會における火の如き飛蛇なること。

三百三十二(第一)。人を救はんとするの神慮は、その運爲を、人の生るるときに、始め、その生涯の終りに、至るまでも、繼續し、それより、後永遠に、及ぶこと。人間種族より天界を作るは宇宙造化の目的そのものなること、此目的を活動せしめ、進行せしむるは、即ち人を救はんの神慮なること、人間以外にある萬物にして、人間のために用をなすものは、造化の第二の目的なること、而して此の如き萬物は、概して言へば、動物、植物、礦物の三界に存在する事物に關するものなること、こは既に上述せる所なり。是等の事物が造化の始めに成立せる神的順序の法則に従ひて、正しく進行するを見るときは、その當初の目的、即ち人間の救済は、亦その順序の法則、即ち神慮の法則に従ひて、絶えず進行せざることあらんや。果樹を見よ。その初めは小さき種子より纖弱なる芽として發生し、その後次第を逐ひて莖を生じ、枝を出し、葉にて蔽はれ、それより花開き、果を結び、その中に未來を繼續すべき新しき種子を生ず

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

るにあらずや。各種の灌木野の草、皆然らざるはなし。彼等における一切の事物は、それよりこれへと、その順序の法則に従ひて進行すること、綿々として絶えざること、實に不可思議なるにあらずや。さらば人類よりして天界を作ると云ふ當初の目的も、亦何故に然らざることあらんや。此目的の進行には、果して絶えず神慮の法則によりて動かざるものとすを得べきか。

人の生命と樹木の成長との間に相應あるが故に、今兩者をして比較せしめよ。人の嬰兒時代は之を地中の種子より正に發生したる木の芽に比すべし。その小兒時代及び青年時代は、之をか幼芽が發育して莖となりその小枝を出したるに比すべし。人のまづ吸收する自然的諸眞は木の枝が葉にて覆はるるが如し。聖言中における葉の義は之に外ならず。人が善と眞との婚姻、即ち靈的婚姻の初歩に入るは、木が春時に至りて花を開くが如し。靈的婚姻の第一結果は初期の果實なり、靈善即ち仁に屬する善は果實の如し。聖言に果實と云ふは皆此義なり。愛よりして智の生るゝは種子の生ずる如し、これによりて人は花園の如く、極樂園の如くなるべし。聖言には亦人を木に喩へたり、愛よりする智は花園に比せり、エデ

ンの樂園とは此義に外ならず。種子よりすれば人は惡木なり、されど尙生活の樹より枝をとり來りて之に接木するの法備はれり、之によりて、もとの木より吸ひ上げられたる液汁は却て善果を生ずるやうになるべし。此比較をなしたるは、樹木の生長及び復活上に、此の如く神慮の不斷に進行するを見るときは、神慮は人類の改悛及び復活に關しても、亦必ずや不斷に運爲せざるべからざること知らしめんためなり。人類の遙かに樹木に優ることは主の言葉に徴して明かなり、曰く、五の雀は二錢にて售るに非ずや、然るに神は其一をも忘れ給はず、爾曹の首の髪また皆かそへらる、故に懼るゝこと勿れ、爾曹は多くの雀より貴れり、爾曹のうち誰かよく思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや、然らば最小事すら能はざるに、何ぞ其他を思ひ煩ふや、百合花は如何にして生長するかを思へ、神は今野にありて明日爐に投げらるゝ草をも如此よそはせ給へば、況して爾曹をや、吁信仰うすき者よ」と、路加傳第十二章の六、七、二十五—二十八。

三百三十三。人を救はんとする神慮は、其運爲を人の生時に始め、其生涯の終りに至るまでも繼續すと云へり、之を理會するには、主は人の性質の如何なるべきかを

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

見得し、其願ふ所は何たるべきか、即ち彼は如何なるものとなるべきかを前知することを知らざるべからず、而して人をして人たらしめ、かくて不死ならしめんためには、その意志の自由を奪ふべからざることは、上來屢説ける如し。故に主は其人の死後の情態を前知し、彼が生時より終焉に至るまでもこれが準備をなし給ふ、主は悪人のためには、之を許しおきながら、また悪より斷えず導き出すやうに取り計らひ、善人のためには、益、善に赴くやうなし給ふ。かくて神慮は絶えず人を救はんと運爲せざるとあらず。されど救はれんと願ふもの、外は救はるゝことなし。神を是認し、神に導かれんと願ふものは即ち救はれんと思ふもの也、神を是認せず自ら導者とならんとするものは、是れ救はるゝを願はざるもの也。そは後者は前者に反し、永遠の生命及び救済につきて思惟せざればなり。主は之を見得して、彼等を導かんとし給はざる時はあらず、而れど、こは常に主が神慮の諸法則によりて行はるゝものにして、之に背き行動するは主も能くし給はず、何となればかくするは、主が神愛及び神智に逆ふもの、即ちおのれ自らに逆ひて行動するものなればなり。然るに今主はすべての人の死後の情態、救はるゝを欲せざるもの、地獄に

おける位地及び救はるゝを願ふもの、天界における位地を前知するが故に、知るべし、上述の如く、主は悪人のためには之を許し、之を引き退かしめ、善人のためには、之を導きて、以てその位地を準備することを。各人の生時より死時に至るまで、絶えず之を爲すにあらざれば、天界も地獄も、その存在を繼續するを得ず、何となれば此の如き準備と同時に神慮なくば、天界と地獄とは只是一場の混亂となるべければなり。各人は主の前知によりてそれ、その位地を準備せらるゝことは、上述の處にて見るべし(二百二、二百三)。こは次の比較によりて例解し得べからんか。射人または砲手ありて的を射るとせよ、而して一哩の距離に直線を畫きて見よ、もし彼にして瓜のはゞほど、其的を外づれたらんにはその矢或は砲丸は、一哩のはてに至らば、その正鵠を去ること、幾許なりとせんか。主もし人の死後における位地を前知し、之を準備するに當りて、寸時なりともその眼を永遠より離すことあらんには、前例と相似ざることあらん。されど主は之を誤らざるなり。蓋し一切の未來は彼にとりては現在なり、而して一切の現在には彼にとりては永遠なり。神慮はすでに其作爲において、無限と永遠とを顧みることが、上來の所説にて見得べし

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

(四十六より六十九、二百十四及び以下)。

三百三十四。神慮の運爲はまた永遠に繼續すと云へり、何となれば天人はみな永遠に至るまでその智を圓滿ならしむればなり。されど何れもその圓滿の度はいの人、此世を去れるとき有したりし善及び眞に對する情動の度如何によらざるはあらず。永遠に至りて圓滿となるべきは此度なり、此度を超えては、すべて天人以外なり、その中にはあらず、而してその外に在るものは、その中に圓滿なるを得ず。次の語は此義を云へるなり。「彼等量を嘉して搖れ、撼りいれ、溢るゝまでにして、爾曹の懐に納れん、爾曹は他の人を赦し物を與ふればなり」路加傳第六章の三七、三十八、是れ仁の善を行へる人なり。

三百三十五(第二)。神慮の運爲は純一なる慈悲よりして、方便によりて、絶えず行はるゝこと。神慮には方便あり、經路あり。方便はこれに由りて人、人となり、その智性と意志とを圓滿にする所のものなり、その經路とはこの事によりて行はるべき所のものを云ふ。人、人となり、その智性を圓滿ならしむる方便とは、一般に名づけて眞と云ふ、眞は想念にては假念となり、記憶にては事物となる。そのまゝには

是れ智識なり、科學はこれより作る。すべて此諸方便は靈的なり、されど自然的事物の中に在るが故に、この神覆、即ち着物よりしては自然の如く見え、或は物質的事物の如く見ゆるもあり。この方便は其數量その變態において無限なり。彼等は或は單純なり、或は複雑なり、また或は完全ならず、或は完全なり。社會的自發的生涯を形成し、完全ならしむる方便あり、又道德的生理的生涯を形成し、完全ならしむるもの、靈的天界的生命を形成し、完全ならしむるものあり。此方便は人の幼時より最終の時期に至るまで、またその後は永遠に及びて、一々其種を異にして行はるべし。その増進するに従ひて、甲乙相從ふ、即ち前の者は後の者のためにその方便となるべし、何となれば是の方便は中位の諸原因を作せる一切の事物に入り込めばなり。また何となれば、これよりして、すべての結果即ちすべての結末は能因的となり、かくて原因となればなり。かくして後の者は順を逐ひて方便となるべし、而して此次第は永遠に進行するが故に、全部を完結すべき最後のもの、即ち終位なるものはこれあらず。何となれば永遠の窮まる所なき如く、永遠に増進する智も亦窮まりなければなり。もし智者の智に限りあらば、その智における歡喜、即ち智の

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

増進し、成熟して止むなきを樂しむ歡喜の情は止み亡ぶべし。その生命の歡喜も亦此の如くならん。而して之に代りて起るは榮譽の歡樂なるべし、これだけにてはその中に天界的生命あらず。是に至りて智者はまた青年の如くならずして老人の如く、やがて廢殘の身となるべし、天界における智者の智は永遠に増進すべけれども、天人の智は神智に及ぶべくもあらず。之を拋物線に例ひて畫ける直線に比すべし、斷へず接近はすれども、之に接觸することは決して之れあらず。またこれを所謂の圓を方化するに譬ふべし。此によりて、人を人たらしめ、またその智性を圓滿ならしむるため、神慮がよりて運爲する方便とは何かと云ふこと、また此方便は一般に名づけて眞と言ふことを明にすべし。人の由りてその意志を形成し、圓滿ならしむる方便も亦極めて多數なり、之を一般に呼びて善と云ふ。これよりして人は愛を有す、その智を有するは前者よりする也。智と愛と和合して此に人あり、何となれば此和合の如く、人も亦然ればなり、此和合これを善と智との婚姻と云ふ。

三百三十六。されど神慮が人を形成し、人を圓滿にせんため、由りて以て其方便

の上に、またその方便により運爲する所の經路はその數においても、その種においても無限なり。人を救はんとて神愛よりする神聖の運爲の如くに無數なり、かくて亦その法則によりて働く神慮の運爲の如くに無數なり。是は上來記述せる如し。此經路は頗る秘密に屬するものなることは、上記の如く、精神が身體に對して働くときの如く、これにつきては人は殆んど何事をも知らずと云ふて可なるほどなり。即ち眼、耳、舌、鼻、皮膚は如何にして感じ、胃は如何にして消化し、腸間膜は如何にして乳糜の上に働き、肝臓は如何にして血の上に働き、脾臓及び脾臓は如何にして血を清め、腎臓は如何にして之を不淨物より分離し、心臓は如何にして之を集散し、肺臓は如何にして之を純ならしめ、また腦は如何にして血を淨め、また之に活氣を與ふるかは皆是れ秘密なり、その他無數の秘密ありて、科學の力も之を徹見する能はざる也。故にこれよりして、神慮の密意は如何ばかり奥秘なるかを明にすべし。その法則だけにても知れるを以て充分となすべし。

三百三十七。神慮が一切の事物を純一の慈悲にて爲し給ふことは、神の實性は純一の愛なるが故なり、神智によりて運爲するは實に此愛なり、此の運爲を神慮と

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

云ふ。此純一の愛は純一の慈悲なることは次の理に由る。(一)この愛は全世界を通じて一切の人の上に動くこと、而して此人はあのれよりしては何事をもなし得ざるもの也。(二)此愛は善き人、正しき人の上に行はるる如く、悪しき人、正しき人の上にも行はるること。(三)此愛は前者の地獄にあるを導き、後者をこれより救ひ出すこと。(四)此愛は絶えず、そこに在る者のために努力し、悪魔即ち地獄の諸惡に逆ひて彼等のために奮闘すること。(五)此愛は此目的のために此世に下り、諸の誘惑を受け、その最後のもの、即ち十字架の悩みまでをも受けたること。(六)此愛は不淨なるものをして淨からしめんため、狂亂せるものをして、中正に歸せしめんため、彼等と共に行動して止むときなきこと。かくして此愛は絶えず純一の慈悲より勞苦するものとす。

三百三十八第三。直接の慈悲よりする瞬時の救済は可能ならざること。前章にて、人を救はんとする神慮は、その運爲をして人の生時に始め、その生涯の終りに至るまで續き、それより後は永久に及ぶことを述べたり、また此運爲は純一の慈悲よりして方便に由りて進行することを述べたり。これより推して、瞬時の救済直接

の慈悲なるものなきを知るべし。されど教會または宗教の事物に關して、少しもその智性より思惟するとせざるものは、多く直接の慈悲によりて救はるるもの故に、救済は瞬間の事なりと信ずるが故に、而かもこは眞と相背き、その上有害なる信仰なるが故に、これを次の順序によりて考究する要あり(一)直接の慈悲よりして瞬時の救済あると信ずるは、人の自然的情態より起るものなること。(二)此信仰は、自然的情態と全く異なる靈的情態を知らざるより起るものなること。(三)基督教界における諸教會の教説は、之をその内奥の立脚地より見れば、直接の慈悲よりする瞬時の救済と相容れざること。されど教會の外的諸人は之を保守すること。第一項。直接の慈悲よりする瞬時の救済を信ずるは、人の自然的情態より起ること。自然人はあのれ的情態よりして思へらく、天界の歡喜は此世の歡喜の如く、流入によりて入り來りて、同様に受けらるゝものなり。例へば貧人が富人となれる時の情態に似たり、悲しき貧苦の状態よりして、樂しき豊富の状態に移るべし。また卑賤なる地位に居たるものは名譽を得るに似たり、輕賤の身よりして光榮に移るべし。また喪者の家より婚禮の盛宴に移るものゝ如くならんと。されど此

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

の如きは日を終へずして轉變すべきが故に、また彼等は死後における人の状態に對して、これ以外の概念を有せざるが故に、直接の慈悲よりして瞬時の救済を信ずるの念は何れより來れるかを明むべし。また此世には、多數の人、同一の仲間、同一の社會に同居して、共に楽しくくらし、而かもその心においては何れも相異なることを得べし。こは自然的情態における場合也。其理は人の内分は互に如何ほど相異るとも、その外分は互に相應せしむるを得べきが故なり。この自然的情態よりして、また救済は只天界に入りて天人の中に交るを許さると云ふにすぎず、而して此の許しは直接の慈悲よりするものと結論する也。故にまた彼等は善人の如く、惡人も亦天界に入るを許され、此世に在りし如く、互に入り亂るべく、只相違する所は、天界は歡喜にて充つること是なりと信ずるなり。

第二項。此信仰は、自然態と全く異なる靈態の如何なるものなるかを知らざるより起ること。靈態、即ち人の死後の情態は上來處々にて之を述べたり、また各人はおのれ自らの愛なると、何人も相似の愛を有せざるものと同居するを得ざること、もしその外のものと共ならんことあらんには、自己の生命を呼吸し得ざること

とも既に述べたる所なり。是故に各人は死後、おのれに似たる人々の團體、即ち相似の愛を有するもの團體に入り來るなり、また彼は此の如き人々を認めておのが親族及び朋友となすなり。不思議なるは、彼が此の如き人々に會ひ、また之を見るや、幼時よりして之を知れるもの、如くなることこれなり、そのかくの如くなるは、その關係靈的なれば也。否、靈界の團體には、何人もおのれの住所以外に止まること能はず、各々皆自有の家あり、彼れ此團體に入るとき、わが家の既に備はれるを見るべし。此家を出づれば他人と交際するを得べし、されどおのれが止まる處は、その家以外なるを得ず、また他人の家庭に入るときも、自己の占むべき位地以外に在ることを得ず。彼もし此外に出づるときは、その心、力、なきが如くになりて、彼は默然たるべし。また不思議なるは、何人も一室に入れば直ちにその占むべき位地を知ることなり。殿堂内におけるも亦然り、公會に集り來るときも亦然り。

これによりて、靈態は全く自然態より異なるものにして、何人もその所主の愛の在る處以外に出づる能はざるを見るべし。何となれば所主の愛の在る處、即ちその生命所屬の歡喜の在る處なればなり。而して何人も此歡喜に居らんことを願

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

ふ。人の靈は此以外に出づる能はざる所以は、その生命實にこれより作り、その人の呼吸そのもの、その心臓の鼓動そのものも實に此に在るが故なり。自然界にては之と異なり。此處にては、人はその外分を粧ふことを知れり、面貌、言語、舉動の上に、その内分の感ぜざる歡樂を粧ふことを知れり。故に自然界における人の情態よりして、死後の情態を推測する能はず、何となれば各人死後の情態は靈的にして、おのが愛に屬する歡樂の外に居る能はざるものなればなり。此歡樂は彼が此世に居るとき、その生涯の如何によりて自ら得たる所とす。これによりて見るべし、地獄所屬の歡樂にをるものは天界所屬の歡樂之を一時に呼びて天界的歡喜と云ふに入るを許されざることを、また同じことなるが、惡を樂しむものは善を樂しむを得ざることを。こはまた何人も死後天界に上るを拒まれざる事實を見て益々分明なるべし、その到るべき途は教へられ、機會は與へられ、またそこに入るを許さるゝなり。されど其人天界に來り、その歡樂を呼吸するときは、その胸に當りて苦痛を感じ、心臓の鼓動苦しくなり、その心遠くなる如く覺えて、火邊におかれたる蛇の如く身をもがきて苦むべし、而して彼の面は天界に背きて地獄の方面に向ひ、直

ちにこゝを去るべし、おのが所主の愛を藏する團體に入るまでは休止せざるべし。故に、何人も直接の慈悲によりて天界に來らざるや分明なり、從ひて世上の人の想像する如く天界に入るとは只其處に來るを許さるゝと云ふに過ぎるや、分明なり。また瞬時の救濟なきを知るべし、こは直接の慈悲を前提とすればなり。

第三項。基督教界における諸教會の教説は、之をその内奥の立脚地より見れば、直接の慈悲よりする瞬時の救濟と相容れざること、されど教會の外的諸人は、之を保守すること。内奥の處より見れば、すべて教會の教説は實地の生涯を教ゆ。人は自ら點檢して、其罪業を見得し、是認し、之を自白し、懺悔し、而して新生涯を營まざるべからずと教へざる教會何れにありとせんか。誰か此勸告と命令なくして聖餐の式に列するを許さるものあらんや、疑ふものあらば自ら尋究して其實に然るを信すべきなり。神誠の十則に基づかざる教説を有する教會何れにあるか。而して神誠の訓箴は實地の生涯に關する訓箴なり。教會の人にして苟も其心に何か教會に關することを具へたらんには、よき生涯を送るものは救はれ、惡しき生涯を送るものは罰せらると云ふを聞くとき、直ちに是認せざるものありとせんか。故

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

に全基督教界を通じて受認せらるゝアタナシヤ教説に従へば、曰く、主は來りて生けるものと、死せるものとを審判し給ふべし。そのとき善を爲したるものは永遠の生命に入り、惡を行ひたるものは永遠の火に入るべしと。これによりて、すべての教會の教説を、その内奥の處より見れば、實地の生涯を教ふることを明らむべし。而して此教説は實地の生涯を教ふるが故に、こはまた救済は實地の生涯に従ふことを教ふるなり。而して人の生涯は一時に吹き込まれるものにあらず、次第を追ひて形成せらるゝ惡を罪として避くるに従ひて改悛せらるゝなり、従ひてその人の罪とは、何かを知りて、之を認め、之を肯ひ、之を意志せず、故に之を行ぜざるとき、また神の知識に關する方便を知るとき、その生涯は形成せられ、改悛せらるゝものにして、一時に注ぎ込まれるものにあらず。何となれば、遺傳的惡はそのまゝに地獄に屬するものなるが、之をまづ除かざるべからず、而してこれに代ふるに善、即ちそのまゝに天界に屬する所のものを植ゑ込まざるべからざればなり。

此遺傳的惡を有する人は、之を智性より見て梟に比すべく、その意志より見て蛇に比すべし。然るに改悛したるものは、之をその智性より見て鳩に比すべく、其意

志より羊に比すべし、故に瞬時の改悛と救済とは、恰も梟を直に鳩と化し、蛇を直に羊と化するが如くなんか。苟も人間の生涯につきて知るものは、誰か之をなすには、梟と蛇との本性を除き去りて、鳩と羊との本性を植ゆるにあらざれば、能はずと云ふことを見ざるものあらんや。分別識に富みたるものは、益々之を富ましめ得べく、智惠あるものは、益々その智を増進し得べきと、分別識と智惠とはその人の心に生長すること、或るものに在りては、幼時よりして生涯の終りに至るまで生長する、こは何人も能く知る所なり、かくて人は、絶えず圓滿にせらるゝを知るべし。さらば何故に靈的分別識及び智惠に關しても、尙更然るべからずと云ふを得んや。こは二級の度を経て、自然的分別識及び智惠を超出し得べし、而してかく向上せるときは、このもの天人的ならん、言語の及ぶ所にあらず。また天人に在りては、永遠に涉りて此の如き増進あることは、上述の如し。さらば、もししか願はば、誰か永遠に涉りて圓滿にせられんとするものを、一時に圓滿にし得べしと思ふを得んや。

三百三十九。これによりて、實地の生涯を基として救済の事を思惟するものは、すべて直接の慈悲よりして瞬時の救済あることを思ふは、あらざるを明にすべし。

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

彼等は却て救済の方便につきて思惟すべし、而して主は神慮の法則に従ひて、その中にまたそれによりて運爲し給ふ、かくて人は純一の慈悲よりして主に導かるるなり。されど實地の生涯よりして救済の事を思はざるものは、救済に瞬時的のものあり、慈悲に直接あるものありと想へり。仁より信を離すものも亦かく想へり、仁は是れ人の生涯の上に存するものなり。彼等はまた以爲らく、信にも瞬時的のものあり、生前ならずば、死時に際して之を得べしと。懺悔なくして罪業の赦免せらるゝことを信ずるものは之を以て罪業の消滅、即ち救済なりとなして、聖餐に赴くものも亦此く思へり。高僧の赦罪を信じ、死人に對する祈禱を信じ、彼等が人の精神に對して有すると云ふ力を基としたる神約を信ずるものも亦しか思へり。

三百四十(第四)。直接の慈悲よりする瞬時の救済は、教會における火の如き飛蛇なること。火の如き飛蛇とは地獄の火によりて輝ける惡を言ふ。以賽亞書に謂ふ所の火の如き飛蛇も亦此義也、ベリシテの全地よ、なんぢをうちし杖をれたればとて喜ぶなかれ、蛇の根より蝮いで、その果はとびかける巨蛇となるべければなり、第十四章の二十九、直接の慈悲による瞬時の救済を信ずるときは、教會内に此の如

き惡が飛ぶまはれるものとす。何故と云ふに、(一)宗教はこれがため廢絶し、(二)保障の念起り、(三)神罰を主に歸すべければなり。

第一項。宗教廢絶のこと。宗教の骨髓をなし、且つ之が普遍の原理となるもの二つあり、神を是認すること、懺悔のことは是なり。この二つは、かの慈悲のみによりて救はれ、その生涯の如何は關せずと信ずるものにとりては、無意義のことなるべし。何となれば彼等は只、神よ、われがために慈悲を垂れ給へと云ふ外何ものをも要せざるべければなり。宗教に屬する自餘の事物につきては、彼等は全く暗黒の中に在り、否、彼は實に暗黒を愛する也。教會の第一要素、即ち神を是認することに關しては、彼等を思へらく、神とは何ぞ。誰れか彼を見たるものあるかと。もしまた、神實に在り、而して神は一なりと述ぶるものあらば、彼等曰ふ、然り、神は一なりと、またもし三體の神なりと云ふものあらば、彼等亦曰ふ、然り、三體あり、されど此三は、見て一と呼ぶべきなりと。かくの如きを以て彼等が所謂の神の是認なるものとなす、教會の第二要素、即ち懺悔につきては、彼等は何等の想念をも有せず、故に罪業に關しても思惟する所なく。彼等は遂に罪業なるものあるかをすら知らざる也。

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

このとき、彼等、律法はまたわれを罰せず、基督教徒はこれがために羈絆せられざればなり、汝もし「神よ、子の故にわれを愍み給へ」と曰はば、則ち救はるべし」と云ふをきき、喜んで之を飲み下すなり。彼等にとりては是懺悔なりと云ふ。されど懺悔を取り去りて見よ、また宗教より實地の生涯を分離して見よ、兩者同じことなり、その跡に残るは只空しき言葉、吾を愍み給へにあらざりや。故に彼等は此文句の結果として救済の瞬時なるを信じ、もし生前に此事をなさずば、その將に死せんとするときになすべきを説くより外なきなり。彼等にとりては、聖言は只岩窟における人より發せる朦朧不明の言説の如く、また偶像の神託者より出でたる迷妄なる應答の如きに過ぎざらんとする也。一言にて曰へば、汝もし懺悔を取り去れば、即ち實地の生涯を宗教より分離すれば、人は地獄の火にて輝ける惡と化する外あらず、即ち教會における火の如き飛蛇となる外あらざる也。そは懺悔なくば人は惡にをり、惡は地獄なればなり。

第二項。純一の慈悲のみよりせる瞬時の救済を信ずれば、これがため、その生涯は保障せらるゝこと。生涯の保障は死後の生涯なしとの信仰か、或は實地の生涯

を救済より分離したるもの、信仰かより起るものとす。後者は、永遠の生命を信ずれども、尙以爲らく、われたとひ善き生涯を送るとも、惡き生涯を送るとも、われは救はるべし、救済は純一の慈悲なるが故に。而して神の慈悲は普遍なり、そは神は何人の死をも願ひ給はざればなりと。もし偶然に、此慈悲は成立の信條によりて哀求すべきものとの考起ることあらんには、彼或は思へらく、生前にこれをなすこととなくば、將に死せんとするとき之を爲して可ならんと。此の如く、その生涯の保障を信ずるものは、姦淫、詐僞、不正、暴虐、瀆神、復仇の惡事を何とも思はざるべく、その肉と靈との欲するがまゝにして、すべて是等の諸惡を行ずるならん。また彼は何を靈的惡及びその慾情と云ふかを知らざるなり。彼もし聖言よりして此事に關して何か聞くことあらんには、恰も黒檀の上に何か落ちて、跳ね飛ぶが如くなるべし、或は坑中に落ちて地下に吸ひ込まらるゝもの、如くなるべし。

第三項。此信仰よりして人は、神罰を主に歸すべきこと。主既に純一の慈悲によりて一切の人を救ふを得べきに、尙救はれざる人ありとせば、其過は人に在らずして、主に在りとの結論は何人も避け得ざる所ならん。或は曰ふ、救済の方便とは

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

信仰なり、而して誰れか此信仰を受け得ざるべきものぞ。こは只一個の想念に過ぎざるが故に、世間的物を出離せる精神の中に注ぎ込まんは誠に容易なるべしと。彼また曰はん、この信仰は、おのれよりして取得すべからずと。故に此信もし與へられずして、神罰を受くるものありとせば、その人は主を以て此責に任ずべきものと思ふ外あらざるべし、そは主に救済の力ありながら、主之を用ゆることを欲せざればなり。こは主を呼びて不慈なりとなすものにあらずや。此の人はまたハの信仰の熱よりして曰はん、主は瞬時に悪人を救ふべき純一の慈悲を有しなから如何にして尙多數の人が神罰を受けて地獄に沈淪するを見んとするかと。此外尙此の如く神性に對して惡罵を逞ふせるものあれど、今は悉く記さず。これによりて、純一の慈悲よりして瞬時の救済を信ずるは、教會における火の如き飛蛇なりと云ふこと、今や分明なるべし。

尙餘白あるによりて、わが次の如く附記するを許せ。或る精靈、地獄より出で來ることを許され、わが前に來りて曰く、汝既に主よりして多くの事を記せり、今はわがために書する所あるべしと。われ曰ふ、われ何を書くべきか。彼等曰ふ、善にせ

よ、惡にせよ、精靈はみな各自の歡樂を有せり、善靈はその善を樂しみ、惡靈はその惡を樂めり、汝しか書すべし。われ問ふ、汝等の樂しむ所如何。かれら曰ふ、そは姦淫竊盜欺瞞虛妄を行ずるの歡樂なりと。われまた尋ねて曰ふ、是等諸歡樂の性質はいかんと。彼等答ふらく、これらの諸歡樂は、他人より見れば、糞土の臭氣の如く、死屍の惡臭の如く、長く蓄はへられたる不淨の香ひに似たりと。われ曰ふ、汝は此の如きを樂しむか。かれら曰ふ、樂しみこれより大なるはあらず。われ曰ふ、さらば汝等は此の如き物體中に生息する汚穢なる動物に似たらずや。彼等曰ふ、似たりと曰はゞ、似たりとせん。されど此の如きは實にわれらが鼻頭の樂しむ所なり。われ問ふ、此以上尙何をか記すべきか。彼等曰ふ、書して曰へ、如何に不淨を極むるものと雖、善靈及び天人を惱ますことなければ、何れも自有の歡樂に居るを許されざるはあらず。されど、われらは彼等を惱ますを禁ずる能はざるが故に、遂ひやられて、地獄に落ちたり、そこにてわれらは苦しむこと甚しと。われ曰ふ、何故に汝は善靈を惱ませしか。彼等答ふ、われら之を禁ずる能はざりき。われら天人を見、また其身邊に神的圓相を見るときは、憤怒の情を忍ぶ能はず。そのときわれ云ふ、さ

主はその神慮の諸法則に逆ひて行動する能はざる所以は……

らば汝等はまた野獸に似たらずや。彼等之をさくや大に怒を發し、憎惡の火の如くなれり。害を加ふことあらんを憚りて、彼等はまた地獄に遷されぬ。

靈界における諸の歡樂は香氣及び惡臭として分明に覺知せらると云ふこと、上來の所述を見るべし(三百三より三百五、三百二十四)。

神慮論終

大正四年七月一日印刷
同 四年七月五日發行

(定價金貳圓三十錢)

譯者 鈴木貞太郎

發行者 高島大圓
東京市小石川區原町六番地

印刷者 佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿七番地



發行所

東京市小石川區原町六番地
振替口座東京一五六八六
電話番町二六〇八

丙午出版社

學習院教授 鈴木大拙先生譯
帝國大學講師

神智と神愛

定價金 一圓五十錢
郵税金 十二錢

本書は天界地獄の遍歴者として學者宗教家を顛倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より説き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹譯筆明快

鈴木大拙先生著

スエデンボルグ

定價金 五十錢
郵税金 六錢

神學界の革命家、天界地獄の遍歴者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、世俗脫塵の高士之を一身に集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教界思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此著成る所以。

鈴木大拙先生譯

新エルサレムと其教説

定價金 六十錢
郵税金 八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教説にして救済には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なることと自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著

鈴木大拙先生譯

天界と地獄

定價金 一圓五十錢
郵税金 八錢

歐米の思想家を顛倒せしめたる名著にしてスエデンボルグが天界及び地獄を遍歴し目撃したる事實を詳述したる奇書なり

東京市小石川區原町六六
丙午出版 社

324
452

終